
fairy-tale

ドルフィン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

fairy-tale

【Nコード】

N6953D

【作者名】

ドルフィン

【あらすじ】

その男の名はP・Y。プレーンヨーグルト。従魔。その少女の名はチトセ。宿主。クールを信条に生きる男と、ネーミングセンス最悪な少女の織り成す御伽噺おとぎばなしの始まり始まり。

第一話「クールな朝」(前書き)

ジャンルをコメディからファンタジーに移しました。ご容赦ください。

第一話「クールな朝」

死ねば楽になる。死ねば楽に……。死んだ後のことなど知りもしないくせに、そう信じて、踏み切りの中に飛び込んだ。

「初めまして、名もなき魂」

そして、彼女と出会った。

そんな、コメディ―無視の暗い幕開け。願い下げの物語。でも、この世界を知ったその日から、ここで出会えることを信じた。死後の世界。夢物語。名付け親は悪魔な天使。こんな法外な世界の中から、俺の夢も叶う確信。

「今から、お前の名はプレーンヨーグルトです」

P・Y。俺を呼ぶなら、そう呼んでくれ。

目の眩む光。耳を裂く轟音。鉄の塊が高速で俺の体を押し潰す。スローモーションで切り取られた世界。別離の瞬間。運転手の青ざめた顔が網膜に残る。少しの罪悪感。後悔はない。この世界に残したのもなにもない。

「さあ、目覚めなさい。プレーンヨーグルト」

ただ、あるとすれば。

「今からあなたは私の従魔まじまじです」

「気だるい朝。気が済むまで惰眠を貪ることこそ、クールな男の信条だ。」

「寝ぼけてないで、さつさと起きてください」

冷やかな言葉が投下され、同時に俺の体中に電流が走った。

「いっただだだだだだだだだ、ぎゃー！」

「朝っぱらから、騒がしいですね。クールな男が聞いて呆れます」

「てんめえ、チトセ！ その起こし方止めろっつってんだろ！ 職権乱用で訴えるぞ、ちくしょう！ 後、プレーンヨーグルトって呼ぶな！」

痛みが治まり、飛び起きた俺は、ベッドの上に立ち、チトセに向けて怒鳴りつけた。しかし、チトセは無言で俺から目を逸らし、直後、再び俺は激痛に苛まれベッドから転げ落ちた。

「いっただだだだだだだだ、ぎゃー！」

「あなたこそ、言葉に気をつけなさい。何様のつもりですか、自称クールガイ」

「ぐ……てめえ、いつか思い知らせてや、ぎゃー！ や、止めてー！」

「では、さつさと着替えて朝食の準備をしなさい。今日は王から直々の呼び出しです。遅刻するわけにはいきませんので」

そう言って、感電死寸前の俺を放置して、チトセは俺の部屋を出て行った。

こんな、朝。こんな、日常。俺がクールな男になれる日は、限りなく遠い。

「あんの、ペチャパイめ……」

捨て台詞の後に、再び流れしてきた電流。静かな朝に、俺の絶叫は遠くまでこだました……。

@@@

あまりにも一瞬な出来事の後に、目の前は暗闇に包まれた。そして、女の声が頭の中で響いてきて、その声は「プレーンヨーグルト」だとか「目覚める」とかわけの分からないことをほざいていた。無視をして眠っていると、体中を電流が流れたような激痛が駆け巡った。そして、飛び起きた俺の目の前には、知らない少女が立っていた。

「おはようございます。プレーンヨーグルト」

「……誰がプレーンヨーグルトだ、誰が」

少女は言った。今俺が立っているこの真っ白な世界は虚無の空間。魂の徘徊する無法地帯だと。

自ら命を絶ち死んだ人間は、みんな魂となってここに送られるらしい。そして、ここでは魂同士がお互いを食い合い、消滅を免れる。

ここでは、魂は他の魂を取り込まなければたちまち消滅してしまう。

だから、と少女は言った。

「私と共に来なさい。私はあなたが気に入りました。このまま消滅させるのは忍びない」

ああ、そうか。そんな風にアツサリ、死んだことを理解している自分がいた。そして、目の前に立つ少女の言葉に疑いを持たなかったのは、紛れもなく少女の言葉が真実だったからなのだろう。まるで魔法でもかけられたように、少女の声は俺の魂を捉えていた。

「俺は、死んだのか？」

「そうです」

「じゃあ、俺を天国にでも連れて行くのか」

「自ら命を投げ捨てた不届き者が、そのようなところに行けると思えますか」

少女の言葉に、俺は思わず口の端を歪めた。

「一つ聞くけど、死後の世界ってのはあるのか」

「ええ。善良な魂の住まう世界です。あなたのような不屈き者は、虚無の世界に送られ、消滅するまで魂を食らい合う。しかし、私と来ればその無限の苦痛から解放されます。もつとも、あなたが消滅することを望むなら、私と来ることは苦痛でしかありません」

少女の相変わらずの無表情な顔はつまらなかつたけど、この状況はかなり笑えた。不屈き者と蔑みながら、俺を誘う少女。しかも、理想的な展開まで用意してくれると来れば笑いは止まりそうになかった。

「では、行きましようか。私の手を取りなさい、プレーンヨーグルト」

「だから、誰がプレーンヨーグルトだ」

「あなたの名です。気に入りましたか」

「却下 いぎゃー！ いだだだだだ、ぎゃー！」

「言い忘れましたが、私はあなたの宿主となります。あなたは私に逆らえません。逆らうと、死なない程度の電流があなたを襲いますから」

「な、なんだ、そりゃ!？」

「では、行きましようか」

そう言って、少女は小さな手を俺に差し出した。

@@@@

「まったく、休みの日くらいゆっくり寝させるよな。王だかなんだか知らねーけどよ」

俺の名はP・Y。従魔^{じょうま}としてそこそこの名が知れた、クールな男だ。ちなみに歳は昨日でちょうど一歳になったばかりだが、別にバブーってわけじゃない。ここじゃ従魔として過ごした時間が、そのまま年齢として取られるわけだ。人間だった頃の俺は十六歳だったらしく、姿形は当時のまま。もっとも、従魔に生前の記憶は与えられないので、俺がどんな人間だったかは分からない。まあ、今ここにクールな男がいるって事で万事解決。クールな男はいちいち過去にはこだわらない。

「王はこの世界を統治する偉大なお方です。いちプレーンヨーグルトごときが、その方に謁見を賜るだけでもありがたいと思いなさい」

そして、毒を吐いてるこいつが俺の宿主、名はチトセ。宿主、つまりご主人様みたいなもんだ。なりは少女（ちなみに生前年齢は十三歳らしい）だが、この世界で三年過ごしているだけに、精神年齢は生前の俺とタメだ。しかし、タメとは思えないほど大っぴらに偉そうなこいつは、実際俺より偉いので始末が悪い。

いきなりのカミングアウトだが、俺の野望はこいつの呪縛から抜け出すことだ。クールな男は何者にも縛られない。そうだろ？ が、

こいつの従魔になってからというもの、ことごとく逃亡を試みた結果、俺は今こうしてキッチンに立ち、料理当番を忠実にこなしている。

電流が首輪代わり。これはもうペットの範疇を超えた、いわゆる隷属。クールじゃないにも程がある。

「朝食を済ませたら、すぐに王城へ向かいます。くれぐれも粗相のないように」

「そう思うなら、ところ構わず電流流してくんじゃねーよ。お前の言う粗相の大半がそれじゃねーか。後、プレーンヨーグルト言うな」

「私のネーミングに不満でも？」

「あぎゃあああああ！ だから、止め……止めてー！」

「プレーンヨーグルトは素晴らしい名前ですと言えば許してあげます」

「なんでプレーンヨーグルトにそこまでこだわんだよお！」

「決まってるでしょう。好きだからです」

「てめえの嗜好なんざ知るかつ！ あぎゃー！」

「早く言わないとほんとに死にますよ？」

いつか……。いつか絶対、こいつの元から逃げ出してやる。そう心に誓いながら、俺は己のプライドを投げ捨てた……。

「プ、プレーンヨーグルトは素晴らしい名前です……」

第二話「歴史を覆す男」

王。その無限の力で、混沌のこの世界に秩序をもたらした絶対的な権力者。生きながらにして神となった伝説的人物。その素顔を知る者はほんの一握りの高官たちだけであり、ここ数十年は誰一人としてその姿を見た者はいない、らしい。

しかし、今日その歴史は覆ることになるだろう。そう……クールに、な。

第二話「歴史を覆す男」

王の住まう王城は、俺たちの住むセントラルシティの中心地にそびえ立っている。小高い丘の上にかでかど建てられた城の外観は、解説するのも馬鹿馬鹿しい。あえて言うなら、これは城というより、巨大なオブジェだ。全長百メートルにも及ぶ、逆立ちした巨大な招き猫。狙いが全く読めない。とにかく、一筋縄じゃないことは確かだ。

「さあ、行きましょうかプレーンヨーグルト」

「あー、今から俺ら逆立ちした巨大招き猫の中に入るのか。しかも、正装で。こんなとこ誰にも見られたくねえー」

「これを招き猫と思うからいけないのです。血統書つきの王のペットだと思い、敬いなさい」

「……なに？ お前の中で王つてのは神なわけ？」

「無駄口を叩いてないで、さっさと行きますよ」

全身真っ白の「シロ」とでも名づけられそうな血統書つきの王のペットは、両手を地面に踏ん張り、力んだ間抜け面までリアルに作りこまれていた。両足はピンと天に向かってまっすぐ伸び、目の前に立つと頂上部分は見取れない。

世にも珍しい三点倒立の芸を仕込まれたペットの間抜け面の前に立つ。ここにはこれで二度目の来訪になるが、やはりこの猫の力んだ顔には慣れない。しかし、なぜわざわざこいつの口に入り口を作ったのだろうか。顔がリアルに作りこまれているだけに、中に入るにはかなりの覚悟がいる。相手が王でなければ、この嫌がらせをかくくぐる物好きはいないだろう。

備え付けの階段をすたすと登り、躊躇なく王のペットの餌となつたチトセの後に続き、俺も開いた口の中に足を踏み入れた。

猫の体内はほとんどが空洞になっている。なぜかといえば、この中には王の居室しか作られていないからだ。無駄な産物というわけだ。

「行きますよ、プレーンヨーグルト」

果てしなく天井の見えない、薄暗い空間の中をすたすたと歩いていき、立ち止まったチトセが、振り返って声を出す。そして、俺は澁々チトセの後に続き、プレートの上に立った。

直径三メートルほどの円形プレートは、上にある王の居室への通行手段だ。音声認識で、自動的に王の居室の前まで移動する。ちなみに、王の居室は猫の腹の辺りに浮かんでいる。

「パスワード、NEKODAISUKINYANKO（猫大好きにゃんにゃんこ）」

「そのパスワードを苦もなく言えるお前ってすげえな」

チトセの声に反応し、足元の円形プレートが仄かな光に包まれた。そして、無音のまま円形プレートはゆっくりと上昇した。

「なあ、チトセ。お前って王の顔見たことあるか？」

「いいえ。私もまだ術者としては日が浅いですから。それに、ここ数十年王の姿を見た者はいないという話ですし。ところで、それがどうかしましたか？」

「もしその数十年の歴史を覆したら教科書に載るかもしれねえだろ？　そして、王の素顔を暴いた英雄として、俺は後世に語り継がれる。クールだぜ」

「その前に、感電死しなければいいですけどね」

ただの脅しではないチトセの痛烈なツッコミに、俺は閉口した。

こいつなら、本気でやりかねない。なんか、こいつ王を崇拜してる感あるし。だが、命を懸けてでも歴史に立ち向かうのがクールつてもんだろ？ 火のついた俺の闘志は、例え電流でも止められない。

「着きましたよ。くれぐれも粗相のないように」

宙に浮かんだ部屋のドアの前でプレートが止まり、チトセが、優しく最終警告を発した。その凜と澄んだ瞳は、途方もなく冷たい。おまけに無表情。やりかねないどころか、間違いなくやるな、こいつ。俺の命より、王が大事かこの野郎。

チトセが部屋のドアを開ける。一面闇に染まった陰鬱な空間が顔を出す。暗いなんてもんじゃやない。そばに居るはずのチトセの姿も見失うほどの漆黒だ。が、俺たちが足を踏み入れると同時に、道を示すように床に仄かな光が灯った。その光は部屋の奥まで続いている。

「なあ。趣味悪いと思うのは俺だけか？」

「私語は慎みなさい」

俺の言葉をつっぱねて、チトセは光に沿って部屋の奥へ進んでいく。仕方なく、俺もチトセの後に続いた。

光の終着で、チトセが立ち止まる。すると、床の光がスッと消えて、また部屋の中は漆黒に包まれた。そして、数メートル前方から王の声が響き渡る。

「従魔師見習い、チトセ。従魔、プレーンヨーグルト。今日はわざわざ呼び出したりして、済まないな」

「滅相もございません」

隣で、チトセが床にひたひた跪く気配がしたので、俺もとりあえず跪いた。王の威厳ある声は、まるでそれ自体に意思があるように、俺の魂にまで響いてくる。チトセの従魔になった日に、初めてここを訪れた時の重圧を思い出す。さすがに王だけあって、その存在感は計り知れない。

「今日お前たちを呼び出したのは他でもない。従魔師見習い、チトセ。お前が従魔師見習いとなって、昨日で三年が経過した。見習い期間を無事修了したことをここに認め、今日から従魔師と名乗ることを許可する」

「ありがとうございます」

「では、匣はこを床に置くがよい」

「はい」

匣はことは、従魔の魂を封じた入れ物のことだ。チトセは、左耳につけているピアスに俺の魂を封じている。正方形のほんの二センチ四方の箱型のピアス。匣のサイズと魂のそれは関係ないのだが、チトセのピアスを見ると、何か自分の魂がちっばけに思えてしょうがない。

チトセが左耳からピアスを外して、床に置く気配をそばで感じる。そして、数秒後、床に置かれたピアスが一瞬弾ける様に発光した。その途端、まるで熱湯を胸にぶちまけられたような、爛れた痛みが胸の内側に走った。そのあまりの痛みには俺は思わずその場に倒れこ

んだ。

「ぐあああ……！ な、なんだ、こりゃあ……！」

「ど、どうしました、プレーンヨーグルト」

「案ずるな。匣につけておいたりリミッターを外したことによる、副作用みたいなものだ。直に治まる。それより、従魔師チトセよ。心して聞くがよい」

「……はい」

「匣につけたリミッターは従魔の魂を保護すると同時に、その力を制限するためのものだ。そのリミッターを外すことにより、従魔はこれまでより強大な力を引き出すことができるだろう。だが、力を引き出すということは、匣から魂を引き出すということでもある。この言葉の重みが理解できるか、従魔師、チトセよ」

「はい」

「力を得るということは、相応の責任も必要となる。従魔師として、その責任を担う覚悟があるなら、匣を再び手に取るがよい」

胸の中で駆け回る激痛が、不意に和らいで消えた。おそらく、チトセがピアスを手に取り、耳につけたのだろう。胸の奥で和らぐ温もりに、妙な落ち着きを感じた。

「では、従魔師チトセ。従魔プレーンヨーグルト。今後のお前たちの活躍を期待しているぞ」

「はい。それでは、失礼します」

「うむ」

くつくつく……。来た来た来た、この瞬間が。帰り際のこの時こそ、王が最も気を抜く瞬間。聞こえてくる声の方向から、王の居る位置も把握した。王の素顔を暴こうなどと、考える者はいても実行に移す者はいないだろう。と、考えるのが普通だ。王さえも。

……くつく。さあ、クールに行くぜ！

「これがクールな男の生き様だっ！」

「……！」

暗闇のせいで、一瞬チトセの出足が遅れることも計算済み。俺は床をけり、王との距離を潰すと同時に、ポケットに忍ばせていたケータイのカメラのボタンを押した。

パシャ！

シャッター音と共に照らされたライトが、一瞬何かを照らし出した。それが王である確信。俺の手の内には、まさに歴史を変える瞬間が。

「うぎゃあああああああ！」

などと酔いしれる前に、体中を電流が駆け巡り、俺は床の上を転げ回った。だが、意地でもケータイは手から離さない。

「やりやがりましたね、この馬鹿野郎。望み通り感電死させてあげましょう」

微妙に丁寧語が崩れているのは、マジギレの証だ。こうなったチトセはもう止まらない。が、こうなることも計算済み。この一言で、チトセは怒りを鎮め、この俺の軍門に下ることだろう。

「ま、待て……！ 王の素顔……！ へへ、お前も興味」

「言いたいことはそれだけですか」

「……へ？」

……止まらなかった。

第三話「王の正体」

従魔師。 従魔を使役し、世界に点在する負の魂を保護する者。

従魔。 下僕。

それがチトセの中での従魔師と従魔の常識的關係。 ふざけんなど言いたくとも、制裁の剣ツノキは事あるごとに、容赦なく俺の体を刺し貫く。

歴史はあまりにも重すぎた。 ってか、チトセの行動を読みきれなかったのが、この俺の命取り。

痺れはやがて俺の全てを侵食していった。

第三話「王の正体」

「では、次のニュースです。 昨日発売された写真週刊誌スキャンダルに掲載された王の正体と銘打たれた写真の波紋は世界中に広がっています。 この写真は昨日発売されたスキャンダル五月十日号に掲載された写真です。 暗がりの中で、はつきりとそれと分かるものが

写りこんでいます。この写真週刊誌スキャンダルは、プライベート
や人権を無視したストーリーカーまがいの過激取材で有名ですが、この
写真に写っているモノが本当に王であるかどうかは定かではなく物
議を醸かもしています。この問題について、王側は事実無根として、写
真週刊誌スキャンダルに対し名誉毀損めいよきうてんで制裁を加えることを視野に
入れているとコメントを発表。一方、これに対し写真週刊誌スキャ
ンダル側は我々は真実を載せているだけ。一歩も引く気はない。と
強気のコメントを発表。一触即発の双方。今後どうなるか、その行
方から目が離せません。

さて。ではこの写真に写っているのが本当に王であるかどうか

「

昨日、写真週刊誌スキャンダルが発売された直後、速報でこの疑
惑はあつという間に世界中に広がった。そして、案の定今朝もテレ
ビの向こう側では王の専門家という肩書きを持つ意味不明の中年オ
ヤジが掲載された写真について、熱心に解説をしていた。

「なんか、すげえ大事になってんな。大丈夫かよ」

台所に立ちつつ、リビングのテレビを眺めながら、俺はそう声を
出してチトセに目をやった。しかし、ソファに腰掛けているチトセ
は、無表情でテレビを眺めたまま、俺に見向きもせず声返して
きた。

「そんなことより、早く朝食の準備をしなさい」

「王より朝食かよ。変わり身の早え奴……」

ボソリと呟いた言葉はバツチリ、チトセの耳に届いていたらしい。
朝っぱらから、俺は悲鳴を上げて台所の床を駆け回るハメになった。

@@@@

制裁の剣が俺の全てを飲み込んだ。体を流れる電流の痺れが薄れて、やがて何も感じなくなつて、自分の命が消えたことを自覚した。ハズだったのだが。

「いい加減起きなさい、プレーンヨーグルト」

チトセの声が頭の中で響いた。それと同時に、まだ死んではいなかったことを自覚する。しかし、今電流を流されては本当に死んでしまいそうだったので、そうなる前に俺は重いまぶたを必死に開いた。そして、俺の顔面に向けてバケツをひっくり返そうとしているチトセと目が合った。

バツシャアア！

大量の水が宙を舞い、俺の顔面に着地成功。地べたに寝かされていた俺は、思わずガバツと上半身を起こして、チトセに怒鳴りつけた。

「な、なにしゃがる！」

「なにつて。あなたがいつまで経っても目を覚まさないからでしょう」

「目え覚ましてたろうが！ 明らかに目が合ったたる！」

「いいじゃないですか。いい気付けになったでしょう」

「気付くってのは気絶してる奴に対してするもんだろがっ！」

「いいから、目が覚めたのなら黙って起きなさい」

いろいろ不満はあったが、これ以上噛み付いても痛い目に遭うだけなので止めておく。それにしても、あれからどうなったのだろうか。王城で王の姿を激写した後の記憶が全くない。我が軍門に下らなかった冷血な従魔師に、てっきり殺されたと思っていたのだが。

辺りを見回すと、どうやらここはウチの裏庭らしかった。そしてチトセは何の説明もせず、戸口に立ちながら、不敵な笑みを俺に向けた。

「さあ、これから歴史の証人になりますよ、プレーンヨーグルト」

「……はあ？」

鉄仮面の少女の微笑みが予兆するのは不吉。そして、チトセの手にはなぜか俺のケータイが握られていた。

つまり、俺はチトセにまんまと利用されていたらしい。

俺が王の正体を暴こうと何らかのアクションを取るとは把握済み。止めると釘を刺せば、俺がますますやる気を出すことも把握済み。そして、俺が王の正体をケータイのカメラで激写。全てはチトセの手のひらの上の出来事だ。

やはり、チトセも王の素顔には興味があつたらしい。しかし、従魔師として王の正体を暴くわけにもいかないの、あえて、馬鹿な従魔を泳がせた。その後、チトセは本気で俺を殺す気で制裁を加える。おそらく人格者であるはずの王が、制止してくれると予想して

「正式に従魔師となつたその日に従魔を殺そうとする従魔師を、王が制止に入らないわけありませんから。それに、その程度の粗相で腹を立てるほど、王も肝っ玉の小さい男ではないでしょう」

リビングのソファに腰掛け事の経緯を説明するチトセの隣に座つた俺は、チトセの言葉に声を返した。

「いや、もし王の肝っ玉が小さかつたらどうなつてたよ」

「死んでましたね」

「てめえ……」

とにかく、思惑通り王がチトセを制止し、俺は気絶だけで済んだ。そして、チトセは俺のケータイに納められた画像を王の前で消去し、王に許しを請う。人格者の王は何の罰も与えず、俺たちを帰した……と。

「で、結局俺が死にそうな目にまで遭って撮った画像は消してんだろ？」

「そんなわけないでしょう。消去した振りしただけですよ」

「……マジでか」

……なるほど。それで、ソファに座り込みながら、俺のケータイ片手に得意な顔してんのか、こいつは。しかし、王を出し抜くとはこいつ、認めたくないが　クールだぜ……！

さすがの王も、チトセの腹の中までは見抜けなかったか。覗いてみれば、間違いなくこいつの腹の中はどす黒く出来ていることだろう。

「ありがたく思いなさい。あなたの働きを認め、あなたが目を覚ますまで中を見ずに待っていてあげたのですから」

「……待ちきれずに水ぶっかけたってわけだな」

俺の言葉を見無視して、チトセはケータイの画面を開いた。

「では、いきますよ。心の準備はいいですか」

「お、おう」

チトセがケータイをいじり、俺は身を乗り出してケータイの画面を覗き込む。

そして、チトセは開けてはならないパンドラの箱を開けた。

「……………」

「……………」

その瞬間、時間が止まったような感覚に陥ったのはチトセも同じことだろう。俺はすぐにはとてもリアクションが取れず、どうやらチトセも同じようだった。

しかし、この如何いかんともし難い空気に耐えられなくなった俺は、恐る恐る、見たままの答えを口に出した。

「……………猿じゃん」

「黙りなさい」

八つ当たりの制裁の剣は、容赦なく俺を刺し貫き、俺はリビングの床を悲鳴を上げてのた打ち回った。その間、チトセはもう一度ケータイを見直してみたら、俺のケータイを壁に向かって投げつけた。

「なんですか、あれは。あの間抜け面の猿公えてこうが王ですか。私を馬鹿にしてるんですか」

「んぎゃあああああ！ 俺のせいじゃねえだろおおおおあぎゃー！」

「私の想像していた王はもっと……もっと……」

床に落ちたケータイの画面には、玉座に座った間抜け面の猿が、目を丸くして鼻をほじりながらカメラ目線で写っていた。

@@@

その日のうちに、チトセはその画像を写真週刊誌スキャンダルにリークした。どうやら、王を崇拜していただけに、想像とあまりにもかけ離れていた実物が許せなかったのだろう。確かに、自分が崇拜していた王が実は猿でしたじゃ、チトセでなくともキレるだろう。ただ、この従魔師のキレ方は常人より陰湿で厄介だというだけだ。

画像にはバツチリ玉座も写っていて、どうやらそれはこの世界に二つとない王専用の玉座であることが判明。科学的に画像が合成ではないことが実証され、このスキャンダルはたったの一日で世界中に広まった。もっとも、王は何も悪いことはしていないのだが。

「いいのか。王の正体がスキャンダルで」

「私を騙し続けていた当然の報いです」

朝食を摂りながら、チトセはフンと鼻を鳴らし、テレビの番組を変えた。しかし、どの番組も「王の正体騒動」を取り上げており、チトセは苛立たしげにテレビの電源を切った。

「で、どうすんだよ。昨日、王の使い魔の伝書鳩来てた。ま、情報発信源は俺らしか考えらんねーしな。下手したらお前、従専（従魔師専門学校）から除名されんじゃねーのか」

「あんな猿の呼び出しなど無視すればいいのです」

「ほんと、変わり身早いな、お前……」

この世界の絶対的権力者の正体の波紋は、一人の従魔師から神を奪った。そして、この出来事がやがて来る戦争の引き金になることを、この時の俺とチトセは全く予期していなかった。

第四話「従専（じゅうせん）」

従魔師専門学校、通称、従専。そこには、様々な従魔師と従魔が在籍し、日々世界の秩序を守るため、修練、勉強に励んでいる。王が設立した従専は、世界に3千校もあり、その中でも王のお膝元であるセントラルシティに造られた第一従魔師専門学校、第一従専は、最も歴史のある誉れ高い世界の代表校、となっている。

ここに在籍できるのは、よっぽどのエリートかよっぽどの変わり者。もしくはエリートで変わり者。ぶっちゃけ、どっちかオンリーって奴はほとんど見かけない。大抵の奴が、エリートで変わり者だ。

もちろん、俺たちも含めて　な。

第四話「じゅうせん従専」

「あーあ。マジで王の呼び出し無視して来ちゃったよ、従専……」

「しつこいですね。あんな猿のことは無視しなさい」

「まあ、俺もあの巨大オブジェに入るのもう御免だけど、かといつて、ここも似たようなもんだしな……複雑なわけだ」

「そうですね。あの猿公えんこうが造ったというだけで吐き気がします」

「……そこまで蔑めるお前ってすげえな」

眉根を寄せて従専の校舎を見上げていたチトセは、俺の言葉にちらりと横目で俺を睨むと、何も言わず校門をくぐっていった。俺もしょうがなくチトセの後に続く。

第一従魔師専門学校。その外観はやはり王城路線に漏れず、全長五十メートルに及ぶ巨大な招き猫だ。そう……ブリッジした巨大招き猫だ。しかも正門側から見たら、猫の顔がひっくり返ってこつちに向いているから、始末が悪い。猿の考えていることは、俺たちにはさっぱり理解できない。

例によって、入り口は半開きの猫の口だ。ブリッジの体制で堪える猫の顔も、やはりリアルに作りこまれている。

備え付けられたエスカレーターに乗り、俺たちは猫の餌となった。内装は別に異常のないベーシックな造りになっている。まあ、建物の構造上、教室の割り振りはちぐはぐだが、生憎と今日俺たちがここを訪れたのは、従魔師として無事に王の認可が下りたことを担任教師に報告するため、教室には用はない。まあ、無事かどうかは疑わしいが。

そもそも、教室を使った授業はほとんどが従魔師見習い一年目の間だけだ。初めの一年で従魔師としての基礎を叩き込まれ、次の一

年では実習を中心とした戦闘訓練、最後の一年は直接任務をこなす場数を踏んでいく（もちろん、見習いの間は先輩従魔師が常についている）。そして、無事見習い期間の三年を修了すれば、一人前の従魔師となれるのだ。

従魔師は常に命の危険が付きまとう過酷な職業だ。しかし、世界の安寧を守るため、従魔師はなくてはならない存在だ。それでも、この世界の住人と従魔師の間にある溝は埋まらない。もっとも、そんなじめじめした話など、クールな俺は気にならないが。

ちなみに、従魔師は見習い期間を終えた時点で、魂の保護を認められる。原則、保護する魂は王の定めた負の魂だけだ。従魔師の役割は、世界に点在する999個の負の魂を保護すること。そうして、晴れて従専を卒業できるというわけだ。

「入りますよ、プレーンヨーグルト」

職員室の前に着いたチトセが、身に着けた従専の制服を正して、俺を振り返った。チトセの催促する視線を受け、俺はTシャツの上に着込んだ緑と黄色を基調にしたトラックジャケットのポケットから手を出した。

チトセがドアを開けると、閑散とした職員室が顔を出した。この時間帯はほとんどの教師が授業に出払っているのだ。しかし、職員室の片隅に担任教師を発見し、俺たちは職員室の中に足を踏み入れた。

「おはようございます、藤丸先生」

先客二人と話をしていたふっさん（藤丸先生）は俺たちに気付く

と、こちらに顔を向け声を返してきた。

「おはよう、チトセ。P・Y。王の認可は下りたか？」

「はい。滞りなく済みました」

はつきりとそう言っただけのチトセの横で、俺はあえて何も言わないでおいた。

「そうか。まあ、お前たちなら大丈夫だとは思っていた。では、任務が決まり次第また連絡する。それまでは家で待機だワン……ん、んん！ 待機だ」

「つぷ！」

ふっさんの犬なまりに、俺は思わず吹き出した。先客の一人も、クスクスと笑っている。そう、なにを隠そうふっさんは犬なのだ。文字通り。

どうやら、犬でも首にネクタイを巻きつければ従専の教師になれるらしい。もはや、このブルドッグが俺たちの担任教師であることに違和感など感じないが。犬のクセにこのおっさん（性別）めちやくちや強いし。人間の言葉扱えるし。

「よ、用が済んだらさっさと出て行けワン！ んん！ 出て行けっ
！」

「つくつくく……！ ！ ふっさん……最高！」

「貴様ら全員三秒以内に俺の視界から失せねえと滅殺だワン！」

「ぎやははははははははははは！」

俺は爆笑しながら、腹を抱えて職員室から逃げ出した。チトセと、先客二人も俺の後に続き職員室から逃げ出し、ドアを閉める。と、ほぼ同時に職員室の中で派手な爆発音が鳴り響き、振動で職員室のドアがガタガタと音を立てた。マジギレしたふっさん相手では命がいくらあっても足りない。俺たちは、腹を抱えながらその場から逃げ出した。

「いや、マジでふっさん最高。犬にしとくのもつたいねえぜ。なあ？」

「馬鹿なことを言うんじゃないやありません。あなたのせいで危うく私たち全員滅殺される場所だったではないですか」

「あっはは。でも、ふっさんの人間バージョンってのも見てみたいな」

「貴様ら二人は、もっと目上の人間を敬うべきだ」

職員室から逃げ出した俺たちは、四人でただっ広い廊下を並んで歩いていた。先ほどの先客の二人は俺たちの知り合いだったのだ。どうやら、アヤセも昨日付けで王の認可が下り、晴れて従魔師となつたらしい。従魔師アヤセ。従魔トウオウ。この二人は、俺たちと同期ってワケだ。

ちなみに、アヤセは少し天然が入っちゃいるが、至って正常だ。そして、トウオウ。こいつは見るからに只者じゃない。ガ克蘭に黒ズボンという硬派な格好を常としているこいつの魂は、頭に乗っ

たちよんまげだ。もちろん、この男本気だ。二十歳（生前年齢）の実直な男が冗談でちよんまげのカツラを被るわけがない。そう、若ハゲのこいつは自前で鬚まげが結えないのだ。しつこいが、至って真面目だ。

「ねえねえ、二人ともテレビ見た？ 今すつごいことになってるよねえ。王の正体騒動。あれってほんとなのかな」

アヤセの悪気のない弾んだ声に、アヤセの隣を歩くチトセの眉がピクンと反応した。ちなみに、アヤセは生前年齢十六歳だ。俺とタメだが、性格が子供じみている分、チトセの方が大人に見える。

「ねえねえ、チトセちゃんはどう思う？ 私は信じらんないんだけどね。王が猿でしたーなんて。あの猿ブサイクだしねえ」

「言葉を慎め、アヤセ。お前は仮にも従魔師だろう」

「えー、だって、気になるじゃん。トウオウだってほんとに興味津々のくせに」

「ぬかせ。武士は黙って主君の命に従うだけだ。その正体を知ろうなど、愚劣な下衆のすることだ。なにやら、あの写真は何者かがりーくしたようだが、そんな奴の気がしれん。己の立場も分からぬ愚物。見つけ出して私が刀の錆にしてくれるわ」

トウオウの言葉に、チトセの眉がピクピクピクと痙攣する。なにやら、きな臭い空気になってきた。俺はすかさず二人の会話の中に飛び込み、フオローに回った。

「つーか、あの猿が王ってのはねーだろ。冗談きつすぎだぜ」

俺の言葉に、アヤセが嬉々として乗っかってきた。

「あつは。だよ。あんなのが王なら私従魔師なんて辞めちゃうよ。でも、あの写真合成じゃないんでしょ？ あの写真正面から撮られてるし、もし本物だったら、撮った人すごいよね。私だったら、王を前にしてとても写真なんて撮れないもん」

アヤセの言葉に、チトセの眉の痙攣が止んだ。しかし、すかさずトウオウが反論する。

「なにが凄いものか。写真週刊誌に情報を売るような下衆だぞ。忠誠心のカケラも持ち合わせないクズだ。存在自体が許せん。いつかこの私が見つけ出して刻んでやる」

「ふふ。さっきから笑わせてくれますね、鬚まげヅラ」

「……なに？」

ついに我慢しきれず言葉を発したチトセの発言は、その場の空気をたちまち険悪にした。チトセの言葉にその場にいる全員はピタリと足を止め、己の魂を侮辱されたトウオウは、怒り心頭な形相でチトセを睨みつけている。

「従魔師チトセ。今……なにか言ったか？」

「あら。聞き取れませんでした？ では、もう一度言ってあげましょう。笑わせないくださいよ。マ・ゲ・ヅ・ラ」

あえてヅラを強調して声を出すチトセ。ただでさえ濃いトウオウ

の顔が、さらに険しさを増していく。殺気立ち睨み合う二人を前に、アヤセはおろおろとするばかりだ。俺はため息を吐き、もう傍観を決め込んだ。

「貴様……私の魂を愚弄する気か？ 例え友人でも、従魔師でもただでは済まさんぞ。今すぐ訂正しろ」

「あなたのような若ハゲを友人に持った憶えはありませんが？ そもそも従魔の分際で従魔師と対等な顔しないでもらえますか？」

「貴様……刻むぞ？」

「お好きにどうぞ。猿のお使いさん」

ヒートアップした二人は、もはや言葉では止まるはずもなく。

「表に出ろ。 決闘だ」

「望むところです」

すたすたと校庭に向かい歩いていく二人をよそに、取り残された俺とアヤセは、なんとも言えない空気の中で顔を見合わせた。

「えっと……なんでこうなっちゃうの？」

「……あいつらの相性が最悪ってことじゃね？」

「そうかなあ。チトセちゃんもトウオウも、性格似てると思っただけどなあ。真面目で責任感あることか」

「あー……王の正体騒動で、二人とも気が立ってんじゃねえの？」

俺の適当な言葉に、アヤセは申し訳なさそうに顔を伏せた。

「そつか。こんなことになるなら、こんな話切り出すんじゃなかったなあ……」

「ま、気にすんな。なるようになるさ」

そう言って俺はポンとアヤセの頭に手を置いた。そんな俺に、アヤセは顔を上げて「へへ」と嬉しそうに笑った。

「ありがと。Pちゃん」

「……その呼び方は止める」

俺は深くため息を吐いた。

第五話「武士の魂」

決闘。それは、己の魂を懸けた闘い。

勃発理由。丁髷ぢやんまげのカツラを馬鹿にされたから。

至って、本気だ。

第五話「武士の魂」

「さあ、行きますよ、プレーンヨーグルト。私に喧嘩を売ったことを、あのハゲにとくと後悔させてやるのです」

「いや、喧嘩売ったのはお前だろ。ってか、なに？ この決闘、俺も参加しちゃってんの？」

チトセと俺。アヤセとトウオウ。ただっ広い校庭の真ん中で距離を置き向かい合う俺たちの取るべき道はもはや一つしかないようだった。向こうでも、アヤセが何とかトウオウをなだめようとしてい

るのだが、トウオウの眼中にはチトセしか入っていないようだ。やがて、アヤセも諦めて肩を落とした。

こちらでも、我が宿主は無表情ながらギリリと鋭い眼光を放っている。

「なあ、決闘なんて止そうぜ。クールじゃねえよ。俺の信条に反するんだよ。分かる？」

「黙りなさい。あなたの信条など知ったことではありません」

「あーだろうな。言ってみただけだよ、ちくしょう」

成り行きとはいえ、一度相手の決闘の申し出を受けてしまっている以上、闘わずに済む術はない。全ての決定権は従魔師が持っているのだ。もっとも、向こうの従魔師は従魔に振り回されてるけどな……。あ、なんか今、トウオウの奴にむかつ腹が立った。

「決闘方式は、従来通り、従魔同士の一騎打ち！ いいな！」

やる気満々のトウオウがまるで宣誓するようにそう吠える。従魔師同士の決闘は、原則従魔同士の一騎打ちだ。従魔が従魔師に危害を加えることは禁止されている。つまり、まあ、この中で一番のとはっちは俺だということが判明したわけだ。ふざけんな。

「相手の獲物は刀です。こちらの方が絶対有利ですが、くれぐれも抜からないように」

「誰にも言うてんだよ」

そう言って、俺は首に手を置いて骨を鳴らした。まあ、成り行きだが、やる以上は絶対勝つ。クールな男にこそ、勝利の二文字はふさわしい。

「……来ますよ」

「ああ」

数メートル向こうで、アヤセが胸に手を置き、目をつぶった。そして、アヤセの左手人差し指につけた指輪がまばゆい光に包まれた。その淡い緑色の輝きは徐々にアヤセの体を覆っていく。

アヤセの持つ匣は指輪だ。そして、指輪から溢れ出る緑色の光は、トウオウの魂そのものだ。従魔師は、己の身に従魔の魂を纏わせて、従魔とシンクロする。そのシンクロ率が高ければ高いほど、従魔は力を発揮することができる。もちろん、シンクロ率を上げれば上げるほど、コントロールは難しくなる。

やがて、緑色の光の膜はアヤセの全身を覆った。そして、トウオウはおもむろに右手を前に突き出し、刹那、抜き身の刀がトウオウの手に握られた。

「いざ！ 尋常に勝負！」

逆に気の抜ける台詞とともに、トウオウがこちらに向かって突進してくる。その間に、チトセはもう、深い暗闇の膜を全身に纏っていた。

正直、俺は自分のこの魂の色が好きじゃない。俺のそれはトウオウのように輝くこともしなければ、宿主を包み込むこともしない。

俺のそれは、輝きとは正反対で、宿主を包み込むどころか、飲み込んでいのような気がしてならない。

それでも、そんなことなど気にも留めずに、チトセは俺とシンク口してくれる。

「……へへ」

「……なんですか、気持ち悪い」

うすら笑う俺を見て、隣でチトセが声を出す。透明感のない、どす黒い闇の膜の向こうで、いつも通り無表情なチトセ。クールなこの俺のパートナーを務められるのは、こいつぐらいのもんだ。

「久々の喧嘩だ。クールに行くぜ」

「では、クールに完膚なきまで叩き潰しなさい。その上で、あの力ツラを引っぺがしなさい。武士の魂とやらを私がこの手で燃やしてやりましょう」

「……相変わらず容赦ねえな」

と、無駄口を叩いているうちに、トウオウがすぐそこまで迫ってきていた。殺気立った目でチトセをガンつけた後、視線は俺に向けられる。そして、トウオウは容赦なく丸腰の俺に刀で斬りつけてきた。

「御免！」

「うおー！」

後ろに飛びのいてトウオウの初撃をかわす。しかし、間髪いれず繰り出される斬撃をいつまでも避け続けることはできなかった。そして、俺が体勢を崩した隙を見逃さず、トウオウは真上から刀を振り下ろしてきた。

「終わりだ、P・Y！」

トウオウの雄たけびに、俺はほくそ笑んだ。そして、丸腰だった俺の手に、銃が握られる。ハンドガンタイプの俺の愛銃。その銃身でトウオウの一撃を受け止めて、いなす。そして、体勢を崩したトウオウの眉間に俺は銃口を押し付けた。

「BANG」

合図と同時に、引き金を引く。しかし、放たれた銃弾をトウオウは紙一重でかわしてから、俺と距離を取った。紙一重の攻防は五分五分。しかし、互いの獲物を見ればどちらが有利なのかは一目瞭然だ。銃を召喚する前に俺を仕留められなかった時点で、トウオウの敗北は決まったも同然だ。

しかし、俺から距離を取り身構えるトウオウに引く気は全く見られなかった。とりあえず、俺は駄目元で説得を試みた。

「もういいだろ、トウオウ。これ以上やっても勝負は見えてる。刀じゃ銃には勝てねえよ」

「そうです。素直に負けを認めるなら、ここで終わりにしてあげますよ。その代わり、そのカッラは没収ですけどね」

「……話がややこしくなるから、お前黙ってる」

後ろから口を出してくるチトセを黙らせて、俺はトウオウに言った。

「決闘なんて、クールな俺の柄じゃねえんだよ」

「そつだよ、トウオウ。もう止めようよ」

トウオウの後ろで、アヤセが心配そうな顔でトウオウに声をかける。しかし、トウオウは宿主の言葉に見向きもせず、頑なに刀を強く握った。

「……P・Yよ。貴様も男なら分かるだろう。男には、決して引くことのできない闘いがあるのだ」

目を閉じ、厳かな顔でそう言葉を発するトウオウは、完璧武士気取りだった。自分の世界に入ってるこいつを説得するのはやはり無理そうだが、一度説得に回ったからには、最後まで付き合わなければ駄目だろうな……。

「えーと。まあ、そう言わずに」

「私は貴様の宿主に魂をけなされた！ 生き恥をさらすぐらいなら、死んだほうがマシだ！」

うわあ。面倒くせえな、こいつ……。この場に居るトウオウ以外の面子はそう思ったことだろう。そもそも、どんまげ丁髷のカツラ被ってる時点で、いじってくださいって言ってるようなもんだ。

「まあ、落ち着けよ」

「問答無用！ どちらにしろ、この勝負に勝てばいいだけの話だ！」

そう叫んでから、トウオウはなにを思っただか、大きく真上に刀を振りかぶったまま、その姿勢で静止した。そして、掛け声と同時に振り下ろされた刀から、緑色の光を帯びた斬撃が飛んできた。文字通り。

俺のすぐ横を通り過ぎていった斬撃は空気を切り裂き、地面まで切り裂いた。俺はその通り過ぎた斬撃を見送ってから、トウオウを振り返った。

「…………マジ？」

「っふ。そういえば、お前と闘うのはこれが初めてだったな。見習い期間を二年飛び級して、たった一年で見習い期間を終えた貴様と一度闘ってみたいと思っていた」

「…………そりゃ、どーも」

「行くぞ、P・Y！」

そう叫び、トウオウが再び飛ぶ斬撃を繰り出してきた。同時に、俺も引き金を引く。そして、斬撃と銃弾がぶつかり合う、その刹那二つの攻撃はぶつかり合う前に何者かに弾かれた。乾いた音が鳴り響くと同時に、衝撃で砂埃が舞う。そして、俺とトウオウの間に舞い上がる砂埃は、徐々に風に流され晴れていく。

唐突な出来事に、その場にいる者は誰一人として動けなかった。

そして、砂埃が晴れてそこに立っていたのは、首にネクタイを巻いたブルドッグ。世にも珍しい、二本足で歩く犬だ。

「なにをやっつてんだワン！」

堂々の登場とともに、高らかに発せられたふっさんの第一声。俺とアヤセは腹を抱えながら必死に笑いを堪えた。いや、笑い事ではないのだが。

「こんの馬鹿たれワン！ 従魔師同士の決闘は校則違反だワン！」

キレると、犬なまりを忘れるブルドッグは、そう怒鳴りながらジャンプして俺の頭を引っ叩いた。俺は痛みと笑いをこらえる苦しさで、死にそうになりながらその場にうずくまった。

しかし、トウオウはクスリとも笑わずに悠然とふっさんの前に立っている。ちなみに、アヤセは笑いを堪えるのに精一杯で、トウオウの魂はすでに匣の中に引っ込んでいた。当然、刀も消えてなくなっている。しかし、トウオウは勇敢にもふっさんに丸腰で立ち向かった。

「藤丸先生。邪魔をしないで戴きたい。私は、その男と決着を着けねばならないのです。武士の魂に懸けて……！」

「やかましいワン！」

ふっさんのジャンピンググッツコミは的確にトウオウの頭をクリーンヒット。おそらく、トウオウの目には、宙を舞うずれ落ちるカラが、スローモーションに見えただろう。

図ったように、カツラはトウオウの手の上に落下した。そして、トウオウはじつとそのカツラを見つめ、そつと自分の禿げ上がった頭を撫でた直後に、泡を吹いて即倒した。

「ト、トウオウ！」

慌ててトウオウの元に駆け寄り、カツラを被せてやるアヤセ。それより、止めを刺してやるのがその男のためじゃないか、とは哀れすぎてとても言い出す気にはなれなかった。

「貴様ら、全員一週間の自宅謹慎だワン！」

こうして、一人前の従魔師になった次の日に、俺たちは罰則を受けるハメになった。しかし、チトセは一人満足げにほくそ笑んでいた。

第六話「シンクロ」

諦めていた。死ぬ前がどうだったかなんて、憶えてない。ただ、意識が芽生えたその時から、諦めていた。

真っ白な空間。虚無の世界。そこに溶け込もうとする、俺の魂。

飲み込まれる感覚。抗う気は起きなかった。

その時、俺の意識の中に声が響いた。

目の覚める電流の痛みに強制的に目を覚まされた。

その少女との出会いは、俺の諦めを払拭した。

第六話「シンクロ」

「暇ですね」

手に持った本をパタンと閉じて、チトセは今日何度目かも知れないお決まりの台詞を口に出した。俺はソファに寝そべって、テレビをポーと眺めながら適当に「あー……」と生返事を返した。

ふっさんから自宅謹慎を言い渡されてから四日が経った。読書で暇を食いつぶしていたチトセも、さすがに五日目ともなると集中力が途切れるらしい。俺はというと、もはやリビングのソファに寝そべり、テレビを日がな一日ポーと眺める、末期症状に陥っている。しかし、慣れてしまえばこのだらけた生活スタイルも悪くない。後三日ぐらいなら、このまま何事もなくテレビを。

「暇なんで外出しますよ、プレーンヨーグルト」

なんて平穩無事には済みそうになかった。

「お前、自宅謹慎の意味知ってるか？」

「今更ですが、犬の言いつけなど律儀に守る必要もないと気付きました。というか、犬のくせに何様のつもりですか」

「……先生様だろ」

しかし、一度言い出したら聞かないチトセのこと。俺は仕方なくソファから気だるい体を起こして、ぼりぼり頭を掻いた。

「で、どこ行くんだよ」

「セントラルパーク、闘武場。一つ、試しておきたいことがあります」

す

「……闘武場？」

自宅から徒歩二十分ほどの距離にある、セントラルシティ記念公園。通称、セントラルパーク。セントラルシティ創立の記念に造られたこの公園は長巨大な公共施設だ。例により、巨大な招き猫が、両手を挙げてピースサインをしているオブジェ（銅像）がシンボルのここは、遊園地並みの設備が整っている。そして、ここには、従魔師専用の訓練場である闘武場も造られている。

セントラルパークを訪れた俺とチトセは、闘武場の一室を借り、中に入った。闘武場はドームのような外観をしている。その広さはよく知らないがとにかくとてつもなく広い。そして、ドームの中は防弾壁で仕切りがなされ、百もの個室が作られている。ホテルのような造りだが、一室一室、訓練に使う上で不自由しない程度の広さは確保されている。

「この前のハゲとの決闘の時に感じました」

「言っとくけど、お前、トウオウの前ではハゲとか言つなよ。また、面倒くせえことになるから」

「茶化さないでください。今は真面目な話をしています」

「……冷やかしてもからかいでもねーよ」

周りを鏡で囲まれたミラーハウスのような一室の中央で俺とチトセは向かい合っていた。天井も足元さえも鏡で作られたここは距離感なんてないに等しい異質空間だ。なんでこんな部屋にしているのかは詳しく知らないが、特訓において様々な利点があるのかないか。ちなみに、鏡は当然防弾ガラスを使用しているので、ちよつとやそつとじゃビクともしない。

「この間、猿公えてこうが匣のリミッターを外したでしょう」

「一応言つとくわ。王の前で猿呼ばわりすんなよ。こっちは多分、面倒くせえじゃ済まねーぞ」

俺の言葉をさらつと無視して、チトセは声を出した。

「ハゲとの決闘の時 私とシンクロした時、あなたは何か感じませんでしたか、プレーンヨーグルト」

「……さあ？ 別にいつもと変わらなかつたけどな」

「私は感じました。あなたが銃を召喚した時から、それは私の中に入り込んできた」

淡々と声を出すチトセに、俺は「入り込んできた？」と聞き返した。

「入り込んできたというより、それは元々そこにあつたのかもしれない。ただ、今までは気付けなかつただけのことなのでしょう」

「……悪いけど、言ってること意味分かんねえよ」

「闇の中にいる時に、目の前に浮かんでいる光の玉のようなもの存在に気付きました。それは、手の中に納まるほどの小さなものなのですが、得体が知れないだけに私はその光の玉に触れることができませんでした。しかし、それは手を伸ばせば、すぐにでも届く距離にふわふわと浮かんでいるのです。そして、思い至りました。それこそ、リミッターで制限されていたものなのだ」と

チトセの言葉に、俺は頭を掻きながら声を返した。

「よく分かんねーけど、つまり、それに触れれば今までより強くなれるってことか？」

「分かりません。ハゲとの決闘の時に試してみようとも思ったのですが、邪魔が入りましたから。だから、これから試してみたいのです」

「なるほどな。やっと話が見えた。でも、大丈夫なのかよ？」

「それをこれから試すんです」

そう言って、チトセは左耳のピアスにそつと手を添えた。

「では、行きますよ。準備はいいですか」

「……ああ」

俺が返事を返すと同時に、チトセは目を閉じて意識を集中した。

やがて、ピアスからもれ出てくる黒いモヤはチトセの小さな体を這っていく。

チトセの身に着けた服がたなびき、肩まで下ろしたショートカットの黒髪が揺れる。暗闇のカーテンがチトセの体を覆いつくし、チトセはそつと目を開けた。

チトセの視線を受け取り、俺は右手を前に出し、銃を召喚する。慣れ親しんだ感触を確かめるように、俺は少しだけ強くグリップを握った。そして「いいぜ」と俺が声を出すと、再びチトセは目を閉じ、小さく息を吐き出した。

シンクロしている時、従魔師と従魔の意識は魂で繋がる。そして、チトセとシンクロしている時、言葉を交わさなくても、チトセの声を頭の中で聞き取れるようになる。

「行きますよ」

頭の中にチトセの声が響く。そして、その直後、ピアスから今まで見たことのない大量の闇が噴出し、それはチトセの体をたちまち覆いつくした。

突然目の前に出来上がった暗闇の壁は、チトセを飲み込んで、なおも肥大していく。繋がっていたチトセの意識が薄れて、離れていく。その感覚は、背筋を走る悪寒に似ていた。

「チトセ！ 今すぐ魂を抑えろ！」

慌てて目の前に立ちはだかる暗闇の壁に向けて叫ぶ。しかし、チトセの声は返ってこなかった。奥行きの方からない暗闇の壁はなお

も肥大している。俺の中で魂が膨れ上がり、チトセを飲み込んでいく実感。たまらず、俺は暗闇の中に飛び込んだ。

一面真っ暗な世界。自分の魂の中。そこは、俺自身の根源であるはずなのに、その世界はまるで俺を受け入れようとはしていなかった。

まるで水の中にいるみたいに、浮力のような力が俺を外へ押し返してくる。その力に抵抗して、もがきながら前に進む。すぐそこにいるチトセに向けて手を伸ばす。小さな光の玉を抱くように胸に置き、両手で包み込んだチトセは、まるで静止画像のようにピクリとも動かなかった。

声が出ない。それでも、必死にチトセに呼びかける。体中を駆け回る血液が熱くなつていくのを感じる。胸が詰まる。息苦しい。魂の中に溶け込んでしまいそんな懸念が、俺の背中を後押しした。

伸ばした手がチトセの手の中にある光の玉に触れた。そして、その瞬間、俺の中に稲妻が落ちたように、何かが入り込んできた。

見たことのない映像が高速で俺の中を通り過ぎていく。次々に移り変わる映像。知らないはずなのに、それが生前の俺の記憶であることを察する。そして、次々に移り変わっていく映像が突然止まって、記憶は一人の少女を映し出した。

「…………チトセ？」

実感のない、それでも途方もない懐かしさ。わけの分からない高ぶりが、俺の胸の奥に広がった。そして、まるで写真を破るように、その映像に唐突に亀裂が入る。その瞬間、俺の頭を激痛が襲い、俺は思わず悲鳴を上げた。

「……プレーンヨーグルト？」

「お。目え覚ましたか」

耳元でチトセが俺の名前を呟く声が聞こえて、俺はホッとして、背中に乗せたチトセに声を返した。

「私は……確か、あなたとシンクロして」

「ったく、世話のかかる宿主だぜ」

「私は……どうなったのですか」

「まあ、死んじやいねーから安心しろ」

まだ、ぼんやりとしているチトセの声に、俺はそつ声を返してやった。

俺の悲鳴に呼応するように、唐突に世界が崩壊した。暗闇のいたるところに光の亀裂が入って、その亀裂はまるで割れるガラスのようになり、暗闇を崩壊させる。散り散りになった暗闇は、残らずチトセのピアスに吸い込まれていった。そして、気がつくといつの間にかガラス張りの部屋の中に立っていた。俺の足元で、チトセは気を失って倒れていた。

「チトセ！ おい」

慌ててチトセを抱き起こした俺は、チトセの顔を見て息を呑んだ。生気を失った瞳。ぐったりとしたままピクリとも動かないチトセは、目を開けたまま意識を失っていた。従魔の魂にのまれた後遺症。俺はすかさず部屋の壁に備えられた非常用ボタンを押した。この闘武場には特訓により怪我人が出ることが多いので、各部屋に緊急時の非常用ボタンが用意されている。

「どーした、どーしたあ！」

非常用ボタンを押して十秒後に、やかましいオヤジがすっ飛んで来た。

白衣を身に着けたこの口髭ぼうぼうのむさ苦しい、小太りのオヤジは、この闘武場の専任医師の一人だ。そして、複数いる医師連中の中でよりによってこいつを引き当ててしまった自分のくじ運のなさに、俺は心の中で舌打ちをした。しかし、今はそんなことを言っている暇はない。

「シンクロした後に、宿主が倒れたんだ！　すぐに診てくれ！」

小太りのオヤジ、もとい、ヘンリーナはすかさずチトセの元に駆け寄ってきてから、息を呑んで目を見開いた。

「こ、こいつめ……」

そのヘンリーナのリアクションに、最悪の事態が俺の脳裏をよぎった。

「……もろワシのタイプの女の子じゃねえか！」

「張り倒すぞ、ロリコンオヤジ」

俺はチトセを抱き起こしたまま、空いた手でヘンリーナの胸倉を掴み上げた。

「おいおい、ボーイ！　冗談だ、冗談！　その手を離せ、診察ができん！」

「だったら、鼻息荒くしてんじゃねえ！」

「シャーラップ！　素人は引っ込んでろ！」

そう叫ぶと、俺の手を押しつけてヘンリーナはチトセの顔を覗き込み、まじまじと見つめた。

「むう……こいつあちよつとやばいな。従魔の魂にあてられたか。すぐに意識を取り戻させねえと、一生目え覚まさせねえぜ、こいつあ……」

「な……」

「安心しろボーイ！ ワシはこの手の患者を多く診てきてんだ！ 対処法も熟知してる！」

そう威勢良く叫んで、ヘンリーナは目をつぶり、おもむろにチトセの唇に自分の唇を被せ ようとしたところを、その頭を引っつかんで無理やり引っ張り上げた。

「……なにやってんだ、お前は」

「見て分からないのか！」

「開き直ってんじゃねえ！」

ヘンリーナの頭を引っ叩き、俺はズイツとヘンリーナに顔を寄せ、ガンつけた。

「ま・じ・め・に・や・れ……！」

「お、おう……。い、いや、ボーイよ。こつなつたら、シヨック療法で無理やり目を覚まさせるしかないのだ。だから、ワシがチツスを」

「シヨック療法……」

ヘンリーナの言葉に、俺は少し考えてから、ズボンのポケットからケータイを取り出した。そして、画面を開き、以前撮った王の画像を表示させ、ケータイの画面をチトセの目の前に持っていった。

「王の正体……」

ボソリとチトセの耳元で呟いてみる。すると、チトセの瞳に生気が戻り、その目はカッと見開かれた。

「その猿公を王と呼ぶんじゃないやありません！」

俺の手からケータイを奪ったチトセは力の限りそれを思いっきり投げつけた。そして、それは超近距離でヘンリーナの顔面に図ったようにクリーンヒット。ヘンリーナは鼻っ柱を押さえ「おーおー」言いながらのた打ち回った。

@@@@

その後、チトセは再び気を失ったのだが、ヘンリーナは心配ないと言った。そして、もちろん、他の医師にチトセを診てもらって心配ないというお墨付きが出たので、気を失ったチトセをおんぶして家路を辿っている。

「……って、わけだ」

家路を辿りながら、徐々に意識のはっきりしてきたチトセに事の経緯を説明する。話を聞き終えたチトセは、俺の肩に頭を預けたまま、声を出した。

「あのオヤジ。今度会ったら、地獄を見せてやりましょう」

「……気持ちは分かるが、ほどほどにしとけよ」

俺の言葉に、チトセは不機嫌そうに息を吐き出した。

夕暮れに照らされたオレンジ色の歩道を、少しの間無言で歩く。そして、不意にチトセが声を出した。

「今の私には、まだあなたの魂を完全にコントロールするのは無理でした」

「……ま、それが分かっただけでも収穫じゃねーの。無理して強くなる必要なんてねーよ。今でも十分無敵だしな」

「あの時、なぜか怖くなかった……」

「は？　なんか言ったか？」

呟かれたチトセの声は小声過ぎて聞き取れなかった。おそらく、独り言なのだろう。返事を返してこないチトセに息を吐いて、俺はまた黙って歩いた。

あの時。自分の魂の中で見た映像の中にチトセがいたことが胸の中に引っかかっていた。あれは、おそらく生前の俺自身の記憶。その中にどうしてチトセがいたのだろう。

初めてチトセが俺の前に現れた時のことを思い出した。真っ白な虚無の世界で、その無表情な少女は俺を気に入ったと言いつつ俺を誘った。不思議と、チトセの言葉を真実として受け入れていた。疑うことも忘れて、ただ、信じた。

そして、俺の世界は変わった。

「なあ、チトセ。お前……なんであの時俺を誘ったんだ」

夕日の光に目を細めながら、俺はまっすぐ前だけを見て歩いた。やがて、チトセは俺の耳元でそっと呟いた。

「運命を感じたから」

「え……」

チトセの言葉に思わず足を止める。チトセは俺の背中を軽く押して、自分から地面に降り立った。

振り返って、チトセと対峙する。そして、チトセは俺と目が合うと言葉を發した。

「　なんて、答えを期待してましたか？」

「は？」

「使いやすそうな魂を選んだだけです。感謝しなさい」

そう言って俺の横を素通りしてすたすたと歩いていくチトセの背中を見て、俺は息を吐いてから呟いた。

「かわいくねー奴……」

第七話「恋の空回り（前編）」

他人の色恋沙汰なんて興味ない。だが「助けてくれ」なんて友人に必死に頼み込まれた日にや、断れないのが、クールな男の悲しい性だ。

「僕、恋しちゃったんだっ！」

「……あのな。そういうもんは高らかに宣言しねえで、密かに自分の胸の中だけに閉まっとけ。ってか、知るか」

「そんなあ！ 助けてくれよお、P・Y！」

「……お前、俺に頼めばうまくいくって思い込んでねえか？」

第七話「恋の空回り（前編）」

それは、ある晴れた日の昼下がり。

「プレーンヨーグルト。プレーンヨーグルトが冷蔵庫の中にある
せん。これはどういうことですか？」

いきなり、ノックもせず俺の部屋に入ってきたチトセは、開口
一番そうのたまった。

「そりゃ、食べばなくなんだろ。昨日の晩、お前食ってたじゃねー
か。ついでに今朝とさつきもな」

「でしたら、今すぐ買ってきなさい」

「はあ？ 食いたきゃ自分で買って来いよ。俺今手え離せねえんだ
よ。ってか、でしたらでつなげる意味が分かんねえよ」

そう。その時の俺は、新種の銃弾を開発するため机に向かい火薬
の調査をしているところだった。しかし、そんな俺にチトセは問答
無用で制裁の剣を刺し貫き、捨て台詞を吐いて立ち去った。

「十分以内に買ってきなさい」

それが、厄介事の幕開けだった。

「……なにやってんだ、お前」

近所のコンビニでプレーンヨーグルトを買った帰り道、電信柱の影にこそそこ隠れている不審者に遭遇した。そいつは、俺に気付くと大げさに後退ってから、電信柱に後頭部をしこたまぶつけた。

「ふぎやあー！」

「……あえてもう一度聞いわ。なにやってんだ、お前」

その場に座り込み、後頭部を抱え「うんうん」唸る馬鹿に白い目を向けながら、声を出す。すると、そいつは涙目で俺を見上げながら「P、P・Y……」と俺の名前を呟いた後、なにを思っかいきなり俺に抱きついてきた。

ので、とっさに迎撃した。

「な、なにするんだよ、P・Y！」

「そりゃこっちの台詞だ。いろいろなにやってんだ、お前は」

「う、うう……。僕はもう駄目だ……。親友に見捨てられたんだ……。生きてる意味が分からない……。死のう……。」

「……出たよ、ネガティブー」

道端で人目をはばからず四つんばいになり落ち込んでいるこの優男は、従魔、ヒザシ。生前年齢十六歳。こいつの宿主も確か今年で

正式な従魔師になってるから、俺と同期なわけで、一応の顔見知りだ。ネガティブブルー入ってるから、あえて誰が親友だってツツコミは控えてるけどな。

「悪いな。俺今急いであるからお前の相手してらんねえんだ。じゃあな」

「そ、そんな！ 待ってくれよ、P・Y！ 僕……恋しちゃったんだっ！」

「……あのな。そういうもんは高らかに宣言しねえで、密かに自分の胸の中だけに閉まっとけ。ってか、知るか」

「そんなあ！ 助けてくれよあ、P・Y！」

「……お前、俺に頼めばうまくいくって思い込んでねえか？」

@@@

「で、家に招待したというわけですか？」

「いや……恋とかお願いとかのワードを連呼されてしがみつかれちゃ妙な誤解されかねえだろ。周りの目が痛くて泣く泣くだ」

ヒザシを連れ帰った俺に問答無用で制裁の剣を振り下ろしたチトセも、プレーンヨーグルトで何とか機嫌を直したようだ。プレーンヨーグルトをスプーンで口に運びながら、チトセは台所のテーブルの向かいに座るヒザシをチラッと見てから、またスプーンを口に運んだ。

「やあ、チトセちゃん。久しぶりだね。元気してる？」

そして、空気が読めずフレンドリーにチトセに話しかけるヒザシ。こいつのこの笑顔だけを取れば、まあ、爽やかな好青年なのだが。

「あなたの顔を見るまでは元気してました」

無表情でヒザシを見もせず、ドぎつい一言をかまして、スプーンを口に運ぶチトセ。

「ああ……僕は最低のクソヤロウだ……クソヤロウだから人の元気を奪うんだ……死のう……」

そして、ネガティブブルースイッチオン。俺は、台所の床で四つんばいになりぶつぶつ呟いているヒザシに小さく息を吐き、隣に座るチトセを睨んだ。

「お前な……」

「ここは私の家です。我が家でまで他人に気を遣うつもりはありません」

「外ではちゃんと気を遣ってるような物言いだな、おい」

「とにかく、このクソヤロウを早く追い返しなさい。私は自室に戻ります」

「クソヤロウ……はは……そうだ、僕はクソヤロウだ……クソから生まれたクソヤロウだ……生きてる意味が分からない……」

プレーンヨーグルト三個入り一パックを手に持ち自室に戻っていくクトセ。その背中を見送ってから、俺は足元で激落ち込んでいるヒザシを見下ろして、呟いた。

「めんどくせ……」

つまり、ヒザシはその時、意中の相手をストーキング中だった。それで、電信柱の影に身を潜めていたわけだ。それで、そんな時に俺に声をかけられ、動揺して思わず助けを求めてきた。と、ヒザシの説明を要約するとこんなところだ。動揺して思わず「恋してる」とカミングアウトしてくる辺り、こいつの面倒臭さが伺えるだろう。そもそも、そんなカミングアウトしてもらおう程、俺はこいつと仲が

いいわけじゃない。

「まさに、この出会いは運命なんだっ！」

「あーそりゃあ、すげえすげえ」

で、チトセがいなくなってから、俺はさっきから一人でヒザシの相手をしてるわけだ。台所のテーブルの向かいで握り拳を作りながら熱心に自分の世界に入ってるこいつをぶん殴りたい衝動を何度も押し殺して。

「一目見た時僕はぴんと来たんだ。これは運命だ、この出会いはそう、運命なんだ。彼女は荒野に咲く健気な一輪の花。僕の荒涼な心の中に舞い降りてきた女神。ああ……彼女のことを考えただけでこんなに胸が苦しいのは何故なんだ……心が痛い」

ほんとに痛い目に遭わせてやろうか？ と口をついて出てきそうな言葉を飲み込みつつ、俺は声を出した。

「で、恋してるのはいいけどよ。向こうはお前のこと知ってるのか？」

「ま、まさか！ 女神に声をかけるなんて僕にはできないよっ！」

「……まあ、ストーキングしてる時点で察してたけどな」

「だから、P・Y！ 僕に力を貸してくれ！」

そう声を上げて俺の手を握ってくるヒザシ。俺はぼりぼりと頭を掻いてから、しょうがねえな、とため息とともに声を出した。

「俺がお前を男にしてやるよ……クールにな」

何事もやるからには絶対勝つ。成功させる。プラスの方向に持っていく。それがクールな男の信条だ。

俺の硬く強い言葉に、ヒザシは目に涙を浮かべて俺に抱きついて来た。

ので、迎撃した。

この作戦には男手の助っ人がいる。とにかく、知り合いに片つ端から電話をかけてみたのだが、これは神のイタズラか。ことごとく用事があると断られ、最後に残されたケータイのメモリーには、とてもこんなことには協力しそうにない、硬派な男の名前が残されていた。

その男の名は、トウオウ。丁髷ちよんまげのカツラに己の魂を懸ける熱血漢だ。

しかし、駄目元でトウオウのケータイに電話をかける。この時代、武士もケータイを持っているのは常識だ。

「どう、P・Y?」

「駄目だな……出ねえ。まあ、あいつの場合協力してくれる可能性は薄いし、ここは俺一人でやるしかねえか……」

「だ、大丈夫なの?」

「まあ、一人より人数多い方がいいんだけどな」

「じ、じゃあ、日を改めてまた……」

「馬鹿野郎。こういうのは思い立ったが吉日なんだよ。クールな男は、何事も先延ばしにやしねえ。明日を夢見るより、今日を見つめてなきゃ何事も成せねえんだよ」

「おお……なんか、かつこいいな、P・Y。すごいよ」

「ふ。止せよ……」

なんてやってるうちに、目的地に到着。どうやら、ヒザシの女神は教会で祈りを捧げるのが日課らしく、毎日夕方この時間には教会に来ているらしいのだ。

信心のカケラも持ち合わせていない俺は、もちろん、スルーすることはあっても、教会内に足を踏み入れたことは一度もない。上半身裸の女神像がシンボルのこの教会は、街中にこじんまりと建ちながらも、結構な信者を獲得しているとかいないとか。この世界に神がいるかいないかなんてどうでもいいが、王な猿とか犬の教師とか妙な生き物が実在するだけに、なんとなくいそいな気がする。

「あ! 待って、P・Y! あれ、トウオウじゃないか!？」

「え？」

まさに教会に入ろうとしていたその時、ヒザシの声が教会のドアを開けようとしていた俺の手を止めた。そして、ヒザシの指差す方を見てみると、ガクランに黒ズボンという暑苦しいファッションで身を固めた、ちゃんまげ丁髷頭の男が。

教会の中に入っていった……。

思わず、電信柱の影に身を隠した俺とヒザシは、意外な男の意外な行動に、顔を見合わせて、教会のドアを見つめた。

硬く閉ざされたドアからは、ミステリアスで危険な香りがぶんぶん漂っていた。

第八話「恋の空回り（後編）」

懺悔^{まじげ}。至^{いた}つて真面目な他人の悩みは、時に耐えがたい笑いに昇華する。 b y、P・Y。

第八話「恋の空回り（後編）」

「か、買ってきたよ、P・Y!」

「うっし。じゃあ、入んぞ」

ヒザシに帽子とサングラス（変装グッズ）を買ってこさせ、俺とヒザシはそれを身につけ変身完了。目深に被ったチューリップハットに、グラサンかけた不審者の二丁上がりだ。その格好で教会に入る気かお前らってツッコみは止めてくれ。神は人を選ばないとか、なんとかか。

トウオウが足を踏み入れたせいで、そこはもうさつきまでとは違う異質空間だ。それもそのはず。この扉の向こうに丁髷のカツラを被った男が入っていったのだ。やはり、神は人を選ばないということか。

「まさか、トウオウが教会に入っていくなんて意外だね」

「……同感だ」

「か、通ってるのかな？」

「さあな」

それはそれで面白いような気もするが。

さて。無駄口はここまでだ。俺は小さく息を吐いてから、ゆっくりと教会の扉を押し開けた。なるべく音を立てないように意識して扉を押すと、扉は無音のまま俺たちを教会の中に誘った。

外の景色とは一線を画した、神秘的な空間がそこには広がっていた。正面、両脇の窓全てはステンドグラスで彩られ、差し込む光が神秘的な輝きを放っていた。そして、正面の通路を挟んで備えられた会衆の席は、講壇上の説教台に向かって集中している。

男は、正面の通路奥。説教台を挟んで、神父と向かい合い立っていた。

二階の正面部分のステンドグラスから差し込む光が、ガクランを着込んだ男を照らしていた。その遅い背中に哀愁を感じるのはいだけか。とにかく、イベント的なものはすでに始まっている雰囲気

だ。

「座るぞ、ヒザシ」

「え、あ……うん」

教会に入った俺たちは、そそくさと、入り口に一番近い席に座り、身をかがめた。

「ト、トウオウ何してるのかな」

「……さあな。俺たちには見守ることしかできねえよ」

教会。武士。この相容れない二つのキーワードを絡めて、事態を予測するなど不可能だ。

ヒザシはごくりと固唾を呑みながら、トウオウの背中を見守っている。当初の目的は完全に忘れ去られたわけだ。それほど、このイベントはインパクトが強いわけだ。どうとでもなれ。

見たところ、教会の中には五人の人間しかいなかった。俺、ヒザシ、そして、前の方の観衆席に座っている一人の女の子。多分、あれがヒザシの女神だな。この位置からじゃ顔は見えない。そこで、説教台の向こうに立っている、口ひげぼうぼうの外人神父に、向かい合って仁王立ちしているトウオウ。

やがて、待っていると神父の方が沈黙を破って声を出した。

「アブラカタブラ、ノケアニータ。ウーマ？」

少し甲高い声が、教会内に反響する。そして、再び静寂が訪れた。

誰もツッコみそうになかったので、俺はとにかくツッコんでおいた。

「いや、何語だよ」

「えっと、多分、チョンピン語じゃない」

「そうか」

普通に返してきたヒザシに、俺はあえて何も言わないでおいた。チョンピン語ってなんだよとか、んな答え期待してねえよとか、お前トウオウと自分の恋どっちが大事なんだよとか。全てどうでもいいことだ。

「ここに立っている自分が本当の自分なのかどうか迷っている……」

そして、思い詰めたようなトウオウの言葉が響く。チョンピン語を駆使する外人神父相手に、真剣な悩みを告白するトウオウ。悩みの質は重いのに、何故か馬鹿みたいに見えるのは誰のせいだ。

「スピラルキナノ、ボンジョルーナ、ウーマ」

「懺悔ざんげしなさいって言ってる」

「よかったな。チョンピン語勉強してて」

神父の言葉を訳すヒザシに、俺はそう言ってやった。えへへ、と照れるヒザシにあえて言うことは何もない。嫌味だよ馬鹿野郎、とか。

「カビノハエタパン、ハ、タベナイノ」

「神は全てをお許しになります。罪を懺悔して楽になりなさい。だつて」

「日本語との落差激しいな」

それはさておき、神父の言葉に、トウオウはゆっくり右手を自分の頭に置き、カツラを取る仕草を見せた。その暴挙に、俺とヒザシは思わず椅子から身を乗り出した。

が、トウオウは思いとどまり、後ろを振り返った。俺とヒザシは慌てて身をかがめた。

「……他人に聞かれたくないのだが」

「コゲタパン、ハ、ザンパンイーキヨ」

「自分を解放しなさい。そうすれば、周りの目など気になりません。あなたを苦しめているものは、その取るに足らない羞恥心なのです。だつて」

「つてか、トウオウもチョンピン語理解してるっばいな」

神父の言葉に、トウオウは真剣に悩んでいた。どうやら、トウオウは本気らしい。というか、この男はいつも本気だ。こいつほんとは馬鹿なんじゃね？ 一年の付き合いで俺の胸に抱かれた疑問に、今日終止符が打たれそうだ。

なんかもう、展開読めたしな。

「お、俺は……俺は……」

ぶるぶると肩を震わしながら、俯くトウオウ。もしかして、ここまでこいつを追い詰めた原因はこの間の決闘も少しはというか間違はなく関係してるよな、と思ったら、なんか少し気の毒になった。止めてやるべきだろうか？ これ以上周りに馬鹿な奴が増えるのも俺が困るしな。

なんて思っている間に、トウオウは己の魂をついに脱ぎ捨てた。

「俺はカツラを被ってるっ！ この丁髷はカツラなんだっ！ 本当の俺はハゲてるんだあああああっあ！！」

その高らかな懺悔はきつと神にも届いたことだろう。でなければ、トウオウの魂は報われない。

右手で自らカツラを剥ぎ取ったトウオウは、己の言葉の衝撃に耐え切れなかったようで、その場で即倒。思わず駆け寄った俺たちが抱き起こすと、そこには、安堵の表情で眠っている若ハゲの男の姿があった。禿げ上がったデコは、気持ちよさそうにステンドグラスから差し込んでくる光を反射していた。

こうして、また一人馬鹿が誕生した……。

と、俺たちがトウオウに気を取られていると、事の成り行きを静かに見守っていた女の子がおもむろに椅子から腰を上げた。

彼女が腰を上げると、まるで彼女の動きに従うように、背中まで伸びた金色の髪が柔らかく揺れた。細く整った肢体は、柔らかい純白のワンピースに包まれ、その佇まいは可憐という言葉しか思い浮

かばなかった。まるでどこぞのお嬢様のような気品溢れる顔立ちはここまでくると、嫌味にしか見えない。ここまで洗練された美少女を、俺も今日初めて目の当たりにした。

ヒザシの奴が惚れてしまうのも無理はないだろう。そして、当初の目的を思い出したヒザシは、口を半開きにして、彼女に見惚れていた。

やがて、彼女は通路に出ると、俺たちの元へ歩み寄ってきた。その顔はきゅっと締まり、何かの決意を感じさせた。しかし、この状況の中、俺は冷静にイベントはまだ終わってはいないかもしれないことを覚悟しておいた。この後の展開まではさすがに読めなかったが。

「神父様……私も懺悔します……」

彼女は、俺たちの前まで来ると、一旦胸に手を置いて静かに息を吐いてから、おもむろに身に着けたワンピースを脱ぎ捨てた。

「私！ いや、俺！ 実は男なんだっ！」

「シヨウミキゲン、シヨウヒキゲン、チガウーノ」

彼女、いや、彼の爆弾発言に、即倒するヒザシ。そして、トランクス一丁、露になった彼の裸体は、確かに男のそれだった。

……もう、どうにでもなれ。

@@@@

「どうしました、プレーンヨーグルト。随分顔色が優れませんね」

「……なあ、チトセ。お前なら、どうする？」

「なんですか、藪から棒に」

「例えば友人が好きになった相手が実は異性じゃなくて、予期せず同性だったと知ってしまった場合だ」

「馬鹿なこと言ってないで、プレーンヨーグルト買ってきなさい。もうなくなりました」

「……食いすぎなんだよ、お前は」

どうやら、ヒザシは彼女……いや、彼がワンピースを脱ぎ捨てるアクションを見せた瞬間に気絶し、彼の告白を聞いてはいなかったみたいで、今も、彼女を探しているとかいないとか。

俺はヒザシに真実を告げてやるべきだろうか。あの日、彼はトウオウの勇氣に男として生きる決心がつかましたと言いつ残し、それはもう嫌になるぐらい可愛い笑顔もついでに残して、ブロンドのカツラを脱ぎ捨て、教会を去っていった。

ヒザシの中で、女神は今日も生き続ける。そして、幻想の彼女を求め、ヒザシはそのうち教会に足を踏み入れるのではないだろうか。

……救いを求めて。

第九話「王の秘書」

天災は忘れた頃にやってくる。そして、そいつも俺たちの頭の中からその事件が消えかけていた頃にやってきた。

ドアを蹴破つて……。

第九話「王の秘書」

暇を持て余していた。ふっさんから言い渡されていた一週間の自宅謹慎もとっくに過ぎ去り、また次の週が終わろうとしているのに、暇を持て余していた。正式な従魔師となつて、もう二週間が過ぎようとしているのに、一向に俺たちに任務はやってこなかった。

もう一度言う。暇を持て余していた。

「……そういえば、P・Y。この間、クソヤロウ（ヒザシのことだ）が来ていましたけど、あれは結局なにをしにウチに来ていたのですか」

リビングのソファに座り、本に目を落としているチトセが、全く興味なさ気にそんなことを聞いてきた。黙って本を読み続けることにいい加減飽きたのだろう。クソヤロウと蔑む相手を話題に上げるほど、とてつもなく暇だということだ。

「なにつて、なんか恋したとかなんとか」

俺はリビングの地べたに敷かれたカーペットにごろ寝した体勢のまま、テレビをボーと眺めながら声を出した。最近では、二人してこんな生活スタイルが続いている。

「従魔の分際で恋とは生意気ですね」

「お前の会話の相手も従魔だって事忘れんなよ」

俺の言葉に、チトセははあ、と息を吐いてパタンと本を閉じた。

「そんなことより、もう二週間も経つというのに、任務が来ないとは……藤丸先生は一体なにをしているのですか」

あつさりそんなことの一言で済ますチトセにあえて言うことは何もない。

「んなこと俺が知るかよ。つーか、やっぱりこの前の決闘の一件がまズかったんじゃないかねえの？」

「だとしたら、全てはあのハゲのせい……」

「……喧嘩売ったのお前だろ」

そういえば、トウオウの奴はあれから大丈夫だったろうか。この間、気絶したトウオウを教会から背負い、自宅まで送り届け、後はアヤセに経緯を説明せずただ「労わってやってくれ」と言い残して押し付けてきたのだが。

ちなみに、今更だが、従魔師はみんな自分の従魔と二人暮らしをしている。一つ屋根の下で寝食を共にすることで、お互いの魂を少しでも近付け、シンクロしやすくするようにとかいう理由からだ。それで、俺たちの住んでるこの一軒家は、王の作った従魔師住居ブロックS地区内にある。従魔師住居ブロックはA〜Sまで地区別にセントラルシティに区分され、従専が管理している。もちろん、生活費もろもろは全て従専もちだ。役得ってやつだ。

さて。それにしても暇だ。チトセも会話に飽きて、また黙って本を読み出した。俺も部屋に戻って新種の銃弾開発にでも取り掛かるうかと、重い腰を上げた時だった。玄関のチャイムが鳴ったのは。

「あなたの友人はウチに上げないように」

チトセのぶつきらぼうな声を背に受け、俺はリビングを出て、玄関に向かった。欠伸を一つ吐いて、玄関のドアを開け　　ようとした時だった。

それはあまりにも一瞬の出来事だった。いきなりだ。いきなり、何の前触れもなく、玄関のドアが俺に向かって迫ってきた。いや、前触れというなら、その前に玄関のドアを蹴り倒したようなド派手な音がしたのだが、とにかく、コンマ数秒のその事態の中で俺にどうしろというのだ。欠伸の後に出了た涙を拭うその体勢のまま、なす術もなく俺は玄関のドアに潰された。駄目押しに倒れこんだドアの

上から踏まれた。

誰かが家の中に侵入していく気配を感じる。その後、部屋の奥でそれと分かる破壊音が響く。響く。響く。遅れて、そういえばリビングにチトセがいたことを思い出す。動き出すきっかけがチトセの身を案じてというのも癪しゃくだな、としこたま打ち付けた後頭部の痛みを目を覚まししながら、呑気なことを考える。

ああ、そうだ。クールな男を玄関のドアの下敷きにさせ、あまつさえ踏みつけていきやがった。十分なぶちのめす理由だ。ってか、不法侵入に器物破損。傷害。出会い頭にこんだけ無作法な輩も初めてだ。さて、そろそろ、思考も回復してきた。

クソ重たい金属の塊を押しのける。部屋の奥で響く音が加速する。銃を召喚して立ち上がる。退屈な眠気を吹き飛ばしてくれたクソヤロウに感謝の意を込めて、この頭の痛みの落とし前のつけ方を考える。ドサクサに紛れて、床に唾を吐き捨てて、俺はご丁寧に締め切られた台所へ続くドアを銃で撃ちつけ、蹴り破った。

そのまま台所には突入せずに、リビングに隣接する手前の部屋へ飛び込む。案の定、敵は蹴破られたドアに気を取られ、背後を向く。その隙に敵の横っ面に照準を合わせ引き金を引く。が、敵はとっさに背後に飛びのいて俺の攻撃をかわした。

チトセをリビングの壁際まで追い込んでいた敵が距離を取り、その隙に俺はチトセの前に立ち、敵と対峙した。銃口を敵に突きつけておき、チラッとチトセの様子を伺う。どうやら怪我はなさそうだ。ってか、この非常時に関わらず片手にまだ本を持ってやがる。思っていたより、ずっと余裕だったようだ。この破壊しつくされたリビングの惨状とは裏腹に。

「……一応聞いてくわ。怪我ねえか」

「あなたは随分頭痛そうですね」

頭から流血状態の俺を見て、言葉を発するチトセ。いや、言ってる場合か。

「……もう少し緊張感持てよ。いきなりわけもなく襲われてんだぞ、俺ら」

「そうですね。少し驚きました」

「……悔しいが、今のお前ってソウクールだな」

「別に嬉しくありませんけど」

ああ、なんかもう、チトセと話していると緊張感が飛んでいく。俺は早々にチトセとの会話を切り上げ、目の前の敵に集中した。

しかし、困ったな。何がって、クールな男は女に手を上げないってのが俺の信条なワケだ。いや、さっき撃つたのはチトセが危なそうだったから、思わずなのだが。つまり、なにが言いたいのかといえば、相手は女だってことだ。

ビキニを身につけ、昼日中からこれでもかと素肌を晒している露出狂。別に、相手のファッションセンスに文句を付ける気はないのだが、強盗に入るのであれば、もう少し格好を選ぶべきだ。いや、これは逃げも隠れもしないって意思表示か。それとも、海と間違えてはっちゃけちゃったとか。なんて考え出してしまっうほど、状況は

切迫している。つまり、どうしよう。

ほとんど紐で作られた、局部を隠すためだけに造られたようないささかの布を身に着けた女性。プロポーションはかなりいい。って、なに言ってるんだ、俺。とにかく、相手はおそらく二十歳前後の女だ。背中辺りまで伸びた赤髪。切れ長の目は、気の強さを表しているようだ。かなり美人だ。がなんとなく、冷たそうな印象を受ける。いきなり襲ってきた相手に、プラスの印象など持てるか。

相手の武器は、右手に握られた鞭だ。握り手の部分からぶらりと垂れ下がったおそらくゴム状の紐。そっち系の人間というのが、格好と武器から推測される今のところ一番現実的な答えだ。

それにしても、さっきまでのどかだったリビングの風景が見る影もなくなくなった。まるで大嵐にでも遭った様な悲惨な光景だ。ソファは三枚に下ろされ、壁に突き刺さっているし、座椅子は骨組みだけになってるし、テレビは 奇跡的に無事だ。さっきから、ワイドショーが呑気に流れている。萎える。ついでに壊しといてくれればよかったのに。

とにかく、破壊されたりリビングをざつと見回して、相手の厄介さを理解する。見ない顔だが、おそらく従魔だろう。一般の女性が鞭一本持つて暴れたところで、ソファは壁に突き刺さらない。よく無事だったな、チトセ。

「 なにもんだよ、あんだ」

銃を突きつけたまま、俺はさしあたっての疑問をぶつけた。目算で相手の鞭の間合いの外。この距離では、俺の方に分がある。質問ぐらいいいだろう。

しかし、女は俺の質問に肩をすくめて「とりあえず、合格点ね」とわけの分らないことを言った。

「……は？」

「従魔の方は不意打ちにあっけなくやられた時点で問題外。でも、その後の動きは悪くない。結果的にとりあえず敵から従魔師を引き離すことにも成功。とりあえず、状況を五分五分まで持ち込んだ。二十九点ね」

「ギリギリ赤点かよ」

ワケが分からなかったが、けなされていることは理解した。撃つても構わないだろうか。しかし、女はこちらの心境などまるで無視して続ける。

「従魔師の方は、いきなり襲われてもパニックにならず、状況を把握してすかさずシンクロナしている。そのおかげで間抜けな従魔はすぐに応戦できた。悲鳴一つ上げないなんてほんといい度胸。あえてシンクロナを弱めて、魂の発光現象を抑えたのは敵に悟られないためね。そのおかげで、従魔の攻撃も敵にとって不意打ちになった。九十点ってところかしら」

女が言い終わると同時に、俺は銃の引き金を引いた。乾いた音が家の中に響き、銃弾は女の頬を掠めて、台所の冷蔵庫にめり込んだ。「……いきなり襲ってきたって、偉そうにこっちの点数つけてんじやねえよ。なにもんだって聞いてんだよ。三秒以内にこっちの質問に答えねえと、今度はためえの眉間に風穴開けるぞ、コラ」

しかし、俺の最高級の脅しをもともせず、女は退屈そうに小指で耳をほじり、耳クソをふっと口の前で吹き捨てて一言。

「赤点に発言権ないのよ」

女の言葉に背後で、チトセが鼻で笑った。クールが信条な俺もここまで馬鹿にされて黙っていられるほどお人好しではない。

「チトセ。シンク口強める。クールに決めてやる……」

「再試験ですか。頑張り屋さんですね」

「……お前から決めてやるうか」

「まあ、家滅茶苦茶にされた落とし前はつけてやりましょうか」

そう言って、チトセのピアスが鈍く光り、暗闇がチトセの体を覆った。俺は左手を宙にかざして、もう一丁の銃を召喚させた。二丁拳銃。これが俺の本気の戦闘スタイルだ。

「待ちなさい、従魔師。こちらに戦闘の意思はないのよ」

「いきなり襲ってきたいてなに言ってやがる！」

女の言葉に、俺は二丁の拳銃を女に向けて、叫んだ。しかし、女は俺と目が合つと、無言で耳をほじくり、ふっと耳クソを吹き捨てた。十分戦闘の意思ありとみなす……ってか、泣かす！

「……どうやら、口で説得は無理みたい」

そう言っただけがため息を吐くと同時に俺は銃の引き金を引いた。しかし、二丁の拳銃をもってしても、弾は女の体を捉えない。この至近距離で、ことごとく女は銃弾をかわしていく。それはまるで銃声をリズムに見立てたダンスのようだ。

「銃口の角度と目線から弾道なんて丸見え。 退屈な攻撃……二十点ね」

「馬鹿にすんじゃねえ！」

銃を乱発しながら女との距離を詰める。しかし、銃声の間に割って入ってきた何かに、左手の銃を弾き落とされ、俺は思わず後ろに飛び退いた。

「遠距離タイプのくせにわざわざ敵の武器の間合いに飛び込んでくるなんて、馬鹿ね。 十点」

右手に持った鞭をぶらぶら揺らしながら、声を出す女。なにが起きたのか一瞬分からなかった。遅れてあの鞭に銃を弾かれたことを察する。

「……！ つクソ！ なんなんだ、この女はよ……！」

この俺が手も足も出ねえなんて、有り得ねえ。 ってか、あの余裕しゃくしゃくな態度がいちいちムカつく。

「相手の挑発にいちいち乗るのもマイナス点。 君もつ落第決定。 さようなら」

「てめえの授業なんざこつちから願ひ下げなんだよっ！」

「待ちなさい、プレーンヨーグルト」

完全にブチきれて女に飛び掛ろうとしたその時、チトセの声が後ろから響いた。同時に俺の体を制裁の剣が刺し貫き、俺は悲鳴を上げて地面の上をのた打ち回った。

その出来事に女は目を丸くした後、肩をすくめて声を出した。

「こちらの話を聞く気になったのかしら」

「強盗の類であれば聞く耳など持ちませんが、それも違うみたいですね。一人で乗り込んでいるところを見ると、ただの従魔でもないみたいです」

「あら。やっぱり、その従魔と違ってあなたは優秀ね。やっと落ち着いて話ができそう」

女の言葉が無表情で受け止め、チトセは制裁の剣を引っ込めて、俺に目を落とした。

「どうですか。少しは目が覚めましたか。クールに決めると言ったくせに、あまり無様な醜態を晒さないでください」

「……怪我人に容赦ねえな。もう少しで死ぬところだったぞ、おい。つてか、時と場合を考えろよ、非常時だぞ、今」

そう言って、俺は頭を押さえながら起き上がった。

「で、どうすんだよ。お前が止めるってんなら、止めてやるけど」

「さっき言ったでしょう。家滅茶苦茶にされた落とし前がまだついてません。それに、私の従魔を馬鹿にされたまま、引き下がる気もありません。ですので、敵わないまでも一矢ぐらいは報いなさい」

「可愛い従魔に、やられて来たってか？」

「かわいい子には旅をさせろというノリです」

チトセの言葉に、俺は「へへ」と笑ってから首に手を置き、骨を鳴らした。

冷静沈着。だが、無表情の裏に隠された意地っ張りで負けず嫌いな子供染みたこいつの性格は嫌いじゃない。

二人してやる気になっている俺たちを見て、女は呆れたようにため息を吐いた。

「まだやる気？ そっちの従魔師は少しは話が分かると思ったんだけど……ま、いいわ。じゃあ、先にさっきの質問に答えとくわ」

「バーカ。んなもんに答えたからって、今更後に引けるかよ。クールな男はやらねえしや引つ込まねえ」

俺の言葉に、女は艶やかに口元に笑みを浮かべてから、声を出した。

「実は私、王の秘書なんだけど……それ、知ってもまだやる？」

「また、思い切った嘘だな、おい」

「嘘じゃないわよ、失礼ね」

いや、ビキニ姿で鞭振り回す女が王の秘書って、信じる方がどうかしてるだろ。が、その告白が嘘であろうとなかろうと、この喧嘩を止める理由にはならない。ってか、逆効果だ。チトセの前では王ってワードは禁句だからな。

「ただの従魔ではなさそうですし、あながちハッターリではなさそうですね……」

チトセの言葉に振り返ってみると、暗闇の中でぴくぴくと眉を痙攣させているのが見て取れた。しかし、女はチトセの異変には気付かない。

「ええ。だから、私の話を」

「せっかくあの猿のことを忘れかけていたというのに……いいでしょう。この喧嘩、正式に買ってあげます」

「は？ いや、別に喧嘩売ってないけど」

「あなたがあの猿の秘書であるなら、あなたの存在自体が私に喧嘩を売ってます」

「呆れた……言ってること滅茶苦茶じゃない？」

女の主張はもっともだが、生憎、今は俺もチトセと同じ心持だ。

「悪いけど、あんた出会い頭から俺に全力で喧嘩売ってるよな？
何のつもりか知らねえけど、人ん家をこんだけ荒らしといて、タダ
で帰れるわけもねえ。そうだろ？ それとも、今更話し聞けって虫
のいい申し出を受けるほど、俺たちがお人好しに見えるか？」

「……人が厚意で言ってあげてるのに。馬鹿な子」

「っへ。てめえの厚意なんざ願い下げだつてよ」

背後でチトセがシンク口を強める。チトセの意識と俺の意識が魂
でつながる。クールな男の本領発揮はここからだ。

「……これ以上は痛いだけじゃ済まないわよ」

第十話「崩壊の引き金」

連戦連勝。常勝無敗。喧嘩（決闘）負けなしのこの俺の本領発揮はここからだ　　って感じていい具合にやる気になっていたのだが。

「なーにをやってんだ！　ワン！」

もう、当然のように人の喧嘩に水をさす、人語を解すブルドッグが俺たちの間に堂々と割って入ってきた。その場に張り詰めていた緊張の糸が切れた。白けた。空気読め、ワン公。

「……いや、またあんたかよ。つーか、何であんたがこんなところにんだ」

「そりゃ、こっちの台詞だワン！　心配して来てみりゃ、またお前か、P・Y！」

「そんで、チトセもな。毎回あんた叱るの俺だけだろ、チトセも叱れ、ひいきすんな。……ついでに、帰れ、いいところなんだよ（小声）」

ふっさんから顔を逸らし、ぼりぼり頭をかいて苛立ちながら声を出す。と、ふっさんは無言で俺に体当たり頭突きを食らわした。股間に。

「ほぎゃあー！」

「半人前が生意気言っな！　ワオン！」

俺の悲鳴に、チトセがプツと吹き出して、シンク口を解いた。自称王の秘書は、退屈そうに欠伸をかまし、ふっさんはワンワン吼え立てる。

そんな感じで、俺の見せ場は犬に持ってかれた。

第十話「崩壊の引き金」

「単刀直入に言うと、今テレビで話題沸騰な王の正体騒動は、事実。つまり、今の王はお猿なわけよ。それは、あんたらが一番よく知ってんでしょ？」

「それで単刀直入のつもりか、この野郎。俺たちを襲った理由から、あんたの素性まで何一つ明らかになんてねえよ」

俺の言葉に、自称王の秘書、もといエレナは何も言わず、小指で耳をほじり、耳クソをフツと吹いた。三度目だ。仏の顔も三度までだ、この野郎。

「てめえ、今すぐ表出る！ 決着つけてやるっ！」

「待て、P・Y。お前はいちいちエレナさんに突っかかるんじゃない。落ち着いて話がでkindる。エレナさんもちいちこいつ挑発しないで頂きたい」

ふっさんの言葉にエレナは気兼ねなく言葉を発した。

「だって、いちいちリアクションが面白いんだもん」

「馬鹿にしてんのか、こら！」

「うん」

「肯定すんな！」

「いい加減にしとかんと店から追い出されるぞ、お前ら」

ふっさんのその言葉に、俺は我に返って店内を見回した。近所のファミレスの窓際隅のテーブル席を陣取った俺たちに、他の客がみんな白い目をして注目していた。ウエイトレスのお姉さんに至っては、他の客の注文をとりながら、あからさまに舌打ちを残して店の奥に消えていく。

その後、ふっさんの口から、この女が本当に王の秘書らしいことを聞いた。とにかく、王の秘書が何故俺たちを襲うのか、俺たちに何の用なのか、ふっさんが何故家に来たのか、現状分からない事だらけで説明を求める俺たちに、エレナは「いや、人の話聞こうとしなかったのあんたらでしょ」とのたまり、また一悶着。

そんでもって「じゃあ、ファミレス行こう。そこで話すよ」というエレナの言葉が尊重され、今俺たちはここにいるというわけだ。ふっさんは一旦従専に来てくれと申し出ていたがエレナは「嫌」の一言で却下。やはり、立場的に王の秘書の方が一介の教師より上ということか。とにかく、ふっさんの態度から、半信半疑ながらエレナが王の秘書であるらしいことを理解する。なんでファミレスだよ、という俺の突っ込みには「なんとなく」と答えが返ってきた。ただアバウトなんだ、この女。

とにかく、エレナにやられた傷に応急処置をし、俺たちは近所のファミレスに入った。ペットは入れませんと、ふっさんは入店を拒まれた。全員吹き出した。このやり取りが見たかったと、本人の前で言っただけのける王の秘書。面白かったから許す。結局、ふっさんは入店できずに、店の外で窓から顔だけ出している。それだけでもウイトレスのお姉さんは嫌な顔をしていたが、ビキニ姿のエレナを目の当たりにした時点で、その顔はすでに引きつっていた。

「とにかく、じゃあ、分かるように説明してくれよ。こっちは襲われて家壊された挙句、怪我までしてんだからな。ここに大人しくついてきてやってるってだけでも、譲歩してんだ」

「ごめんね、怪我させて。あの程度の不意打ちにやられるほど君が弱っちいなんて知らなかったの。腕試ししといて正解だったね」

「んだ、ごめやー…」

エレナの言葉にまた怒鳴ろうとした俺の体に電流が走った。そして、隣で仰け反りながら悲鳴を上げる俺を無視して、チトセが声を出した。

「少し黙っていなさい、プレーンヨーグルト。エレナさんと言いましたね。腕試しというのはどういう意味ですか」

「そのままの意味だよ」

エレナの答えに、さすがのチトセも眉根を寄せた。そして、窓から顔を出しているふっさん、もつと詳しく説明するなら、外から窓までよじ登り、半身だけ窓に乗り出しているふっさんが、声を出した。

「このままではらちがあかので、俺から話す。先ほど、上の方からお前たちに初任務の指令が来たのだ。そして、その報告の中で、なにやら王の秘書、つまりエレナさんが、ちよつと散歩に行つてくる、と言つて出て行つたので後始末は頼んだと面倒ごとを押し付けられた。説明すると、エレナさんは新人従魔師にちよつかいを出す悪い癖があつてな。初任務を迎える前の新人従魔師に毎回腕試しをするんだ」

「不意打ちで腕試しかよ。ふざけやがつて」

「じゃあ、自己紹介した後によればよかつた？ 任務で敵に不意打ちされて卑怯だつて文句垂れてる間に殺されるタイプだね、あんた」

「プライベートタイムに味方に襲われて文句垂れねえ奴いるかよ！」

「いないね」

エレナに襲い掛かろうとする俺をチトセが止めるこの図はもうお約束なので、あえて省略する。しかし、ふっさんのおかげで現状は

把握できた。つまり、ただの災難だったというわけだ。ふざけんな。

「では、ようやく私たちに任務が来たのですね」

全ての災難を無視して、チトセが話を前に持っていていった。仕方なく、俺は隣で黙っている。すると、エレナが声を出した。

「ちょっと、待って。その前にあんたたちは自分たちのした事の重大さを知らなきゃダメでしょ。なんか、自覚してないみたいだけど。まあ、そのために私が来たんだからいいけどね」

「何の話だよ」

エレナのわけの分からない言葉に、俺は苛立ちながら声を返した。しかし、隣でチトセは向かいに座るエレナを見つめ「王の正体騒動のことですか」と言葉を発した。

「やっぱり、あんたは優秀ね。間抜けな赤点従魔の従魔師にしとくのもつたいないぐらい」

「その減らず口叩けなくしてやろうか」

俺は拳を鳴らしながら、エレナを睨んだ。もちろん、チトセに止められるので飛び掛りはしない。しかし、エレナは俺に目をやった後に、なにを言うでもなく目を逸らした。いちいち馬鹿にされているような気がするのは決して気のせいではない。女を本気で殴ってやりたいと思ったのは、初めてだ。

「王の正体騒動とこの二人と何か関係が？」

話の腰を戻すように声を出す、ふっさん。やばい。そういえば、ふっさんは何も知らないのだ。が、こちらの事情を無視して、エレナはアツサリ言った。

「王の正体を写真週刊誌にリークしたのこの二人なの」

「……空気読め、お前」

まあ、隠し通せるとも思っていなかったが。それで、ふっさんは、ああ。あまりのショックに気を失って落下した。俺たちのしでかしたことが大事だって事を分かりやすく表現してくれたわけだ。

「あーあ。藤丸さん、よっほどショックだったのね。あんたらのせいだよ」

「直接手を下したのあんただろ」

「つまり、あなたがここにるのはただの腕試しのためだけではないのですね」

俺たち二人をよそに、一人チトセが冷静に声を出した。

「制裁にでも来たのですか？」

「まさか。なら、とっくにあんたらのこと始末してるよ。王は寛大な人だから、その件に関してはあんたらにお咎めなし。今日来たのはあくまで私情ね。王の恩恵を受けといて、そのことに気付きもせず、それを仇で返すような馬鹿。これ、誰のことか分かる？」

「寛大な人ではなく、寛大な猿の間違いでしょう」

軽い口調で明らかに喧嘩を売っているエレナに、チトセが無表情で切り返す。なんか、俺だけ空気に乗り遅れた感じで、二人のやり取りを見守るしかない。

「じゃあ、自覚しといて。あんたらが世界崩壊の引き金を引いたってこと」

「私たちは真実を白日の元に晒しただけです」

私たちって、ああ。いつの間にか俺も共犯ってワケか。リークしたのはチトセの独断なのだが。ってか、世界崩壊ってオイ。

「全ての物事には意味があるの。もちろん、長年王が表に顔を出してこなかったことにも意味がある。世界の秩序を守るって意味がねでも、何も知らずにあんたらがそれを壊した。ただの好奇心だった幼稚な答えじゃ事態は済まされない。今、世界は崩壊に向かって動き出してるの」

「……なんの冗談だ？」

「冗談じゃないわよ」

たまりかねて発した俺の言葉を、あっさりと否定するエレナ。言葉の重みと態度が全くミスマッチだ。冗談にしか受け取れない。

「世界は今安定してる。でも、それは王がいて初めて成立する平和つまり、今の安寧は王の絶対的な力がもたらしているものよ。力による統制は、力がなくなれば瓦解する。今は影を潜めてるけど、世界には王を敵視する危険な志向を持った抵抗勢力が存在する。あん

たらは世界中に散るその抵抗勢力に、王が力を失くしたって事を盛大にアピールしたのよ。メディアを通じてね」

「ちょっと、待ってください。王は元々猿ではないのですか。力を失くしたというのはどういうことですか」

「王の正体があんなお猿なわけないでしょ。私も、お猿な王しか見たことないけど。なんか、ずっと昔に呪いにかかったらしいわ。それで、力と容姿を失ってお猿にされた。王が表に顔を出さなくなったのは、それが原因ね。力を失くしたことが知られたら、抵抗勢力の格好の的だもの」

「おい。それって……まずいんじゃないのか」

「そうだよ。世間にはニュースで流してないけど、もう世界は荒れ始めてる」

「……なら、もっと深刻そうに話せ」

「堅苦しいこと堅苦しく話すの苦手なの」

エレナの言葉に、俺は閉口した。この女に緊張感というものはないらしい。なんか、第一印象から連想される性格と全然違うな、この女。

「それで、世界崩壊の引き金とやらを引いた私たちに責任を取れということですか」

チトセが、淡々と言葉を発した。微塵も責任を感じてない口ぶりだ。ってか、やっぱ俺も込みなのな。

「だから、ここに居るのは私情だつて言ってるでしょ？ 王はこの件であんたらを咎めるつもりはないの。ただ、引き金を引いたあんたらが何も知らないつてのは罪でしょ。まあ、あんたらみたいな新人に世界の責任が取れるなんてこつちも思つてないから安心して」

「安心しろですつて？ 馬鹿馬鹿しい。そもそも、あなたの言うてることは最初からずれてます。世界崩壊の引き金なんてもの、私たちが引く前にすでにあなた方が引いてるも同然じゃないですか。あなた方は王を隠し立てして、問題を先延ばししてただけでしょう。呪いか何か知りませんが、王たる者がそんなことで力を失くすとは笑い話にもなりません。そもそも世界の平和のために表に顔を出さないのではなく、間抜けな姿を世界に晒したくなかつただけなのではないですか。でも、残念。私がこの手で晒してやりましたけどね。これで、笑い話になりました。よかつたですね」

「……とことん王を蔑んでるな、お前」

チトセの言葉に、俺は呆れて突っ込みを入れた。開き直つたこいつに適う者はおそらく誰もいないだろう。

チトセの言葉を黙つて聞いていたエレナは、相変わらず軽い調子で言葉を発した。

「ま、どう思おうがそちらの自由だけど、王は寛大で立派な人格者よ。で、私は今ここに私情で来てる。言ってる意味分かる？」

「あら。私たちの始末はしないんじゃないやありませんでしたの、ミス、エレナ」

「あんたが王を侮辱するまではね」

いつの間にか険悪ムードぶんぶんの中でにらみ合う二人。なんか話がまたややこしい方向に流れているが、俺にしてみれば願ったり叶ったりな状況だ。これで、大手を振ってこの女をぶん殴れる。

「じゃあ、場所を変えるわよ。今度は邪魔が入らないように、藤丸さんが寝てる間に済ませてあげるわ」

「望むところです。行きますよプレーンヨーグルト」

さっさと店内を出て行く二人を見送り、雰囲気に乗遅れた俺はその場に突っ立ったまま、呟いた。

「支払い、俺持ちかよ……」

第十一話「自魂師（じこんし）」

ネイティブ、カタワレ、ソウルサイド、従魔、従魔師、自魂師。
この世界の理。

そんなことより、俺にとっちゃ目の前の決闘をいかにしてクールに勝つか。そっちのほうが重要だ。

第十一話「自魂師」

そういえばすっかり忘れていたことだが、王の正体をチトセが写真週刊誌にリークしてから、王の使い魔の伝書鳩が来ていた。再三我が家の窓をつついていた辛抱強い伝書鳩も、一週間ほど無視するとぱったり来なくなっただので、俺もすっかり忘れていた。

というか、エレナが王の秘書だと名乗った時点で「王の正体騒動」を連想するべきだった。すっかり忘れてしまっぐらい、ただのスキヤンダルで済むことだと思っていたことが、世界崩壊の引き金と来

たもんだ。エレナがドアを蹴破るのも分かる気がする。

が、それがクールな男をコケにしている理由にはならない。もつとも、俺よりチトセの方が、一方的に襲われたことを根に持っていたらしい。開き直ると同時に、自分の罪を他人に転嫁し、王をボロクソにけなし、挑発しの三連コンボ。開き直り方も並じゃないのだ、この従魔師は。

「プレーンヨーグルト。分かっているとは思いますが、今のままではどうひっくり返っても、私たちはあの女には勝てません」

「……それが自分から喧嘩売っつという言う台詞か」

ファミレスを出た俺たちは、セントラルパーク闘武場を目指し、歩いていった。あそこならいくら暴れても大丈夫だろうし邪魔も入らない、おまけに、俺たちを片付けた後もボタン一つで医師が飛んでくるので一石三鳥、なんて舐めたことをエレナが言い出した。もちろん前二つの意見だけに納得し、俺たちはエレナについて歩いている。

「あの時、あなたが不意打ちを食らいもたついている間に、あの女はいつでも私を殺すことができました。あの女が言うようにあの時はただの腕試し。あの女は全く本気ではありませんでした。それは、直接手を合わせたあなたが身に染みて感じたはずですよ」

しゃくな話だが、チトセの言葉に間違いはなかった。俺は数メートル前を堂々とビキニ姿で歩く、ふざけた女に目を向けて舌打ちをした。

「あの女はどうやら自魂師じこんしのようですよ。つまり、私達より明らか

格上なのです」

「……じこんし？　なんだ、それ」

「知ってますけど、言わせてください。この、馬鹿野郎」

「知ってんなら一生胸に秘めてる、チクシヨウ」

チトセの痛烈な一言に言い返す術もなく、言葉を返す。そんな俺にチトセは何事もなかったように声を出した。

「自らの魂を師すると書いて、自魂師。自魂師とは従魔師の上にする職業なのです」

チトセの言葉に、俺はぱりぱりと頭を掻いて、言葉を発した。

「えっと……もう少し分かりやすく」

「では馬鹿にも分かるように説明します」

「ありがとよ、チクシヨウ」

「従魔、従魔師、自魂師、カタワレと呼ばれる私たち」

チトセの言葉の途中で、俺はぱりぱりと頭を掻いて声を出した。

「……悪い。カタワレって？」

「では、救いようのない無知な馬鹿にも分かるように説明します」

「……ありがとよ、コンチクシヨウ」

無表情でけなされるってのは、どうよ。

「この世界には大きく分けて二つの人種が存在します。一つはネイティブ、一つはカタワレ。ネイティブとは元々この世界に存在する人達のことです。そして、カタワレとはことは別の世界から運ばれてきた人達。つまり、我々のことを指します。」

カタワレとは、こことは違う世界、俗に言われる現世で死した魂の通称です。現世で死んだ魂はこの世界、ソウルサイドに運ばれ、再生されます。ですが全ての魂がソウルサイドに運ばれるわけではありません。ソウルサイドに運ばれるのは善良な魂のみで、それ以外の魂は全て虚無の空間に運ばれます。」

世界の仕組みについてはどうせ話してもあなたは忘れますから、今詳しくは話しません。それで、本題はここからです。」

我々、カタワレと呼ばれる人種は、三つの職業に分かれ、世界に従事しています。すなわち、従魔、従魔師、自魂師です。」

この三つの並びは、そのまま階級順と考えてください。ただし、自魂師だけは特別なのです。なぜなら、転生を拒み、この世界に残った者。それが自魂師だからです。」

つまり、我々カタワレは、魂となってソウルサイドに運ばれた後、再び現世に転生するために、従魔師としてこの世界で負の魂を99命保護します。それがこの世界の理ことわり。ですが、999命の負の魂を保護した後も、転生せずに、この世界に留まる従魔師が稀に存在します。それが自魂師なのです。」

分かりましたか？」

「分かりま千円」

理解できなかったことを分かりやすく表現してみたら、ひどい目

に遭った。そして、気を取り直して、チトセが声を出した。

「自魂師の最大の強みは、自らの魂を扱えることです。従魔のように従魔師とシンクロしなくても、己の魂を具現化できる。何より、実戦経験の差は私達と比べ物になりません。ですが、これだけの相手と手を合わせる機会は滅多にありませんので」

「聞いてて分かったのは、お前が怖いもの知らずってことだけだが」

「ビビったなら、帰っていいですよ」

「んな後が怖い真似誰がするか。ってか、クールな男に逃げはねえ。ただ、一つ気になることがあんだけど、いいか」

「まだ質問があるとは、天晴れな馬鹿ですね」

「ちげえよ」

チトセの言葉に声を被せて、否定する。そんな俺に、チトセは横目で俺をちらりと見てから、目を逸らした。俺は一つ息を吐いて、言葉を発する。

「お前、なに焦ってたんだ？」

「何のことですか」

「いつものお前なら、勝ち目のねえ喧嘩をふっかけることなんてまじしねえだろ。でも、お前の口から勝ちに結びつく言葉は一つも出てこねえ。それどころか、勝ち目がねえなんて言って、敵の脅威を長々と語ってやがる」

「あなたが聞いてきたのでしよう、この馬鹿」

「おあぎゃー！　ち、ちが！　そういうことじゃなくて、ぎゃー！」

一通り地面をのた打ち回った後、俺は気を取り直して声を出した。

「らしくねえって言ってんだよ。いつものお前なら、俺の質問なんて無視して相手が誰でも勝てばいいってノリだろ。でも、今のお前のノリは負けて当たり前って感じた。俺の質問に答えてんのも、負けの言い訳してるようにしか見えなかったぜ。」

つまり、今のお前とじゃ、あの女に勝てる気がこれっぽっちもしねえって事だ。頭冷やせ」

「無意味な説教をどうも。ですが頭を冷やすのはあなたの方です。最初から、この喧嘩（決闘）の目的は勝つことではなく、今より強くなることなのでから」

「なんだそりゃ。負けても強くなればいい？　クールじゃねえにも程があんだろ。負けるつもりで得られる力なんてクソの役にも立たねえよ。頭冷やせ、馬鹿」

「馬鹿に馬鹿と言われる筋合いなどありません」

チトセの言葉とともに、俺の体を電流が駆け巡った。三度地面みたびをのた打ち回る俺を振り返り、エレナは余裕で俺達に声をかけた。

「ねえ。さつきからなんかもめてるみたいだけど、あんたが王を侮辱したこと取り消せば、許してあげるけど？」

そう言って、チトセを指差すエレナ。チトセは無言でエレナを睨んでから、早足にエレナの横を素通りして行った。

「私の厚意は願ひ下げ、か。随分嫌われちゃったな。ま、いいけど」

「……馬鹿野郎」

地面にひっくり返ったまま、俺はチトセの背中に呟いた。

@ @ @

さすが王の秘書、ここは感心するところか。当然のことながら、気兼ねなくビキニ姿でセントラルパークに入ろうとしたエレナは、正面ゲートで係員に引き止められた。が、制止に入ってきた係員二人は、エレナの顔を見て、すぐに「失礼しました！」と深々と頭を下げ、中に入れてしまった。顔パスだ。

さて、闘武場の一室に入った俺達は、決闘をする前にこなさなければならぬイベントを抱えていた。もっとも、チトセが入室して迷いなく非常ボタンを押すのを見るまで、俺もすっかり忘れていた。

非常ボタンを押して十秒後「どーした、どーしたあ！」とやかましい声を出しながらヘンリーナがすっ飛んできた。本来ならば外れであるが、この場合は当たりだ。チトセはヘンリーナが部屋に入ってくる、すかさず俺とシンク口し、俺に銃を召喚するよう命じた。

ヘンリーナがこちらに慌しく駆け寄ってくる。チトセが、俺の手から銃を奪い取り、背中に隠す。ヘンリーナがチトセに気付き、馴れ馴れしく手を振る。チトセも手を振ってみせる。ヘンリーナの鼻息が荒くなる。チトセもヘンリーナの元へ歩いていく。

俺とエレナは、各々事の成り行きを黙って見守った。

二人が部屋の中央で対峙した。

「いよお！ この前は大変だったなあ！ もう平気なのかい嬢ちゃん！」

「ええ、おかげ様で。その節は大変お世話になったそうですね。是非お礼を受け取ってもらいたいのですが、よろしいですか？」

「ははは、よせやい！ ワシは医者として当然のことをしたまでだぜ！」

「そう言わずに受け取ってください。ほんの気持ちですから」

「そうかい？ そこまで言われちゃ仕方ねえ！ だが、嬢ちゃん。ワシに惚れちゃいけねえぜ？ なんてなあ！」

「ご機嫌で下品な笑い声を上げるヘンリーナに、チトセはクスリと

も笑わずに、背中に隠した銃を突きつけた。股間に。

「ご機嫌よう、クソオヤジ」

「ほぎゃあ！」

乾いた銃声と悲鳴が絡まって部屋の中に反響した。そして、そこには股間を押さえた惨めな変死体が一つ。弾は抜いておいたが、俺の銃は魂の波動を直接打ち込める代物だ。弾がない分威力は軽減されるが、ゼロ距離で急所を打たれば……見ての通りだ。

時折、ぴくぴくと体を痙攣させ気絶したヘンリーナ。因果応報というには、あまりにも酷だ。俺は何も言わず、非常ボタンを押してやった。

「あの子、Sね……」

エレナが、まるで同情するように俺の耳元でそつと呟いた。

第十二話「ステージ2（前編）」

「強くなることに躊躇ちゆうちゆうするなんてあなたらしくありませんね、プリンヨーゲルト。クールな男が聞いて呆れます」

「バカ野郎。この前のこともう忘れたのかよ。今度は無事に済む保証なんてどこにも」

「約束。忘れたわけではないでしょう？」

そう言って、チトセは滅多に見せない微笑みを俺に向けた。その微笑みは、俺の取るに足らない不安を溶かして、俺にあの時と同じ答えを引っ張り出させた。

「……とーぜんだろ」

クールな台詞で、ほくそ笑む。不安も恐怖も、後ろ向きなものすべてに振り返らずに、ただ前しか見ていないこいつは、多分馬鹿に違いない。

第十二話「ステージ2（前編）」

「これ、最終警告ね。王を侮辱したこと取り消すなら、ここで許してあげるけど？」

「侮辱などしていません。事実を述べただけです。それでムキになつてるあなたの方こそ、凶星だという証拠では？」

エレナの最終警告にあくまで挑発をかまし切り返すチトセ。そんなチトセに、エレナは「そう」と言葉を返し、その顔から表情を消した。

魂を解放したわけでもなく、ただその場に佇んでいるだけなのに、明らかに場の空気が変わった。ビキニ姿で堂々と外を出歩く変質者に言いたくないが、やはりこの女は只者じゃない。いろんな意味でも。

エレナと数メートル距離を置いて対峙する俺とチトセ。チトセのピアスから漏れ出る暗闇がチトセの体を這っていく。

極限まで張りつめた空気が、わずかな俺の動きに反応して弾ける。俺が二丁拳銃を召喚すると同時に、エレナは鏡張りの地面を蹴り、一直線に俺達との間合いを詰めてきた。……てか、進行方向もろチトセだ。

「てめえの相手はこの俺だ！」

そう叫んで、俺はチトセの前に立って、エレナに照準を合わせる。まっすぐに突っ込んでくるなんて、狙い打ってくださと言われてるようなもんだ。遠慮なく、俺は引き金を引いた。瞬間、図ったようにエレナは反復横飛びで俺の攻撃をことごとくかわしていく。って、マジかよ。

「確かに従魔師同士の決闘は、従魔師に手を出しちゃダメってのが原則だけだね」

一発も被弾せず、エレナは俺の横をすり抜けながら、声を出す。

「私、自魂師だから」

「チトセ！」

エレナの動きを追って振り返った時には、エレナはすでにチトセとの距離を潰していた。とっさに拳銃を構えながらも、射程内にチトセがいることが俺を躊躇させる。その一瞬の間に、チトセの体が宙を舞った。

「くそ！」

追撃しようとするエレナに向け、銃を連射する。鏡張りの部屋のせいで、こちらの動きはばれればれた。振り返りもせず、エレナは横に跳び俺の攻撃をかわす。その間に懐にしようていを受けて吹っ飛んだチトセが、鈍い音とともに鏡の上に叩きつけられた。

「おい！ 大丈夫か、チトセ！」

すかさずチトセの元に駆け寄り、倒れたチトセを抱き起こす。苦

悶の表情を浮かべながら、チトセが苦しそうにせき込む。今まで幾度となく決闘や実戦を重ねてきたが、チトセに敵の攻撃が及ぶのはこれが初めてのことだった。

「野郎……」

「実戦じゃ、従魔師は常に敵に狙われるわよ。だって、従魔師殺せば、従魔は何もできないもの。それに、従魔師って、従魔に比べて極端に戦闘能力低いよ。普段、従魔に頼り切ってるし、何より自分の魂は具現化できないから」

「んなこた分かってんよ！ 俺がこいつ守ればいいだけの話だ！」

「いやいや、守れてないから言ってるの」

「ぐう……」

悔しいがエレナの言うとおりだったので反論できなかった。今までは、なんて言ってみたところで、無意味なことは分かっている。こいつ相手に、これまでの実戦経験なんてまるで役に立ちはしない。

「一人じゃ自分の魂を扱えない不完全な存在。それが私たちだった。元々、未来のなかった私たちを拾い上げてくれたのが、他でもない王なのよ。自分たちの無力と同時に、あんたらは王の偉大さを身をもって知るべきね」

「……聞いて呆れますね」

今まで黙っていたチトセが、その言葉を漏らして、体を起こした。

「なんですって?」

「聞いて呆れる、と言ったんです。あなたのしている行為はただの自己満足です。それで自分を満たすのは勝手ですが、そんなくたらない持論に私たちを巻き込まないでもらえます?」

「……」

俺は何も言わずチトセを見守った。口元を緩め、歪んだ笑みを相手に向けてチトセ。その表情は相手を貶める際おとしに形作られる無意識の魔性だ。一発きついの人れられたんで、相当キテるな、こりゃ。

「忠誠は他人が無理強いするものではないでしょう。強制された忠誠など、その辺のゴミと一緒にポイ捨てされるのが関の山です。大体、王が私たちにそれを望んでるのですか? だとしたら、人間の器が知れるというものです。いちいち代価を求めてくるようなちまちました人間についていく人は誰もいませんよ。まあ、猿の時点で問題外ですけど? そもそも秘書がいちいち王の偉大さを力づくで説こうとすること自体馬鹿げて」

「これ以上のおしゃべりはどうやら無駄ね」

そう呟いた直後、オレンジ色の輝きが、エレナの体から発光した。オレンジの光は、鏡に反射して部屋中をまばゆい光で包みこむ。同時に、俺はチトセを脇に抱えて、背後に飛びのき、エレナから距離をとった。

「……お前な。俺達の立場分かってんのか。こうなる前にキツイ一発かまそうって俺の算段見事にぶち壊しやがって」

「あなたごときの算段が通じる相手ではないでしょう」

「……」

……キツイなこいつ。

「どうせこうなるなら、少しでもこちらのペースに乗せておきたかっただけです。それよりも、あれをやりますよ。準備はいいですか」

「あれって」

「この状況で察っせないとはやはり馬鹿」

「ちげえよ！ 今のはまさかでつなげようとしてたんだよ！ お前の中の俺はどこまで馬鹿なんだ、こら！」

「そんなことはどうでも」

「よくねえ！」

一通り言い合った後に、俺たちは黙り込んだ。分かってる。このやり取りも、この先に待ち受けている不安を先延ばしにする行為でしかない。

肥大し続けるエレナの魂の波光が徐々に落ち着きを取り戻し、エレナの魂の型を彩る。その様子と向かい合いながら、先にチトセが声を出した。

「何を恐れているのですか？」

チトセの言葉に、俺は黙ってチトセに目を留めた。

「言つときますけど、それがあの女に対してのものではないのなら、余計なお世話です」

「……チトセ」

「強くなることに躊躇するなんてあなたらしくありませんね、プレーンヨーグルト。クールな男が聞いて呆れます」

「バカ野郎。この前のこともう忘れたのかよ。今度は無事に済む保証なんてどこにも」

「約束。忘れたわけではないでしょう?」

そう言って、チトセは滅多に見せない微笑みを俺に向けた。その微笑みは、俺の取るに足らない不安を溶かして、俺にあの時と同じ答えを引っ張り出させた。

「……とーぜんだろ」

クールな台詞で、ほくそ笑む。不安も恐怖も、後ろ向きなものすべてに振り返らずに、ただ前しか見ていないこいつは、多分馬鹿に違いない。

あの頃と全く変わらないチトセの眼差しに、俺の覚悟は決まった。

「プレーンヨーグルト。シンクロする前に一ついいですか?」

「? なんだよ」

「先程言っていたあなたの言葉がどうも引つかかってまして。俺がこいつ守ればいいだけの話だ。って、とこです。私がいっつあなたに守ってもらいました？ 従魔の分際でナイト気取りとほいい気なものですね」

大勝負の前に、そんな気の萎えることを言い出すチトセ。に、俺は切実に訴えてやった。

「……空気読んでもの言え」

第十三話「ステージ2（中編）」

魂の形。通称ソウルインフ。従魔、従魔師、自魂師、通じて一流の使い手が魂を解放した時、それは姿を表す。

「……いろんな意味ですげえな」

「どっという意味ですか？」

「あー……ノーコメントってことで」

第十三話「ステージ2（中編）」

肥大化したオレンジ色に輝く魂の波光が、エレナを包み込んでいた。

魂の形。通称ソウルインフ。今まで何度か見たことはあったが、

これほど巨大なソウルインフを見るのはさすがに初めてのことだった。

魂の大きさはそのまま強さへと直結する。つまり、ソウルインフが大きければ大きいほど、その強さも伺えるというわけなのだが……。

「……いろんな意味ですげえな」

「どついつ意味ですか？」

「あー……ノーコメントってことで」

言ってる場合ではなく、間違いなくいわゆる窮地に立たされている俺達だが、シリアスマードになれないのは誰のせいだ。

エレナのソウルインフは巨大な蜂　いわゆる女王蜂というのは一目瞭然だった。なぜなら、蜂が鞭を片手に、ブラジャー（水着かどうかは不明。ってか、どうでもいい）を装着しているのだ。下を身につけてないのが唯一の救いか……アホか。

「これが本当の女王蜂ですね」

「……うまいこと言ったかと思うなよ？」

「ただの冗談です」

「……真顔でか」

しかし……ソウルインフの形状は当然本人の性格が反映するもの

なのだが、昆虫に仮装させるってのはどうよ。まあ、変態っぷりも性格も見事なまでに写し取られたソウルインフではあるが、問題は形状ではなくその大きさだ。

全長十メートルはあろうかという超巨大なキラビー。目の前に体長十メートルの蜂が立ちはだかることを入念に想像してもらえれば、分かりやすいか。とてつもなくやばい。様々な意味で。

「……プレーンヨーグルト」

「おう。いっちょ、クールに決めようぜ」

俺のクールな台詞に、チトセの痛烈毒舌が炸裂した。無表情で。

「あなたがクールに決めると言って、そうだった試しはありませんので黙っててください」

「……だから、空気読んでもの言え」

向かい合うだけで押し潰されてしまいそうな重圧が俺達に喧嘩を売ってくる。完全に本気モードに変身完了したエレナが、おもむろに右手を頭上にかざす。すると、ソウルインフの持つ巨大な鞭がみるみる縮んでいき、エレナの手に納まった。

その刹那、空気が弾けた。

遅れて響いた甲高い破壊音に、俺とチトセは目を丸くすることしかできない。気がつくと、エレナの立つ位置から、俺とチトセの間を、図ったように一直線の破壊跡が鏡張りの地面に刻まれ、防弾性の鏡の破片が宙を舞っていた。

少なくとも、俺達とエレナの間には十メートル以上の距離があった。エレナの持つ鞭は物理的にはおそらく3、4メートルほどが射程限界の近距離タイプ of 武器なのだが……。

「やっべえな、こりゃ……」

「つーか、今、何されたかも分かんねえ。」

「今更怖気づいても仕方ありません。いきますよ、プレーンヨーグルト」

「お、おう……」

エレナのソウルインフから伝ってくる重圧に殺気が上乗せされる。

チトセがゆっくりと目を閉じて、俺の魂に触れた。

@ @ @ @

暗闇に閉ざされた世界の上に立っていた。

気がつくと、当たり前のようにそこに立っている自分に疑問を持つていないのは、多分、チトセの意識とシンクロしているからなのだろう。

「プレーンヨーグルト」

振り返ると、後ろにチトセが立っていた。

「よう」

「初めてですね。あなたとここで話をするのは」

チトセの言う「ここ」に俺は目を向けた。何も無い真つ暗闇。光も音もすべてを飲み込むような陰気な場所なのに、チトセの姿がつきりと俺の目に映るのは、その声が俺に届くのは、多分チトセが俺の魂に触れているからだ。

誰も受け入れないちっぽけな俺の世界。魂と言い換えてもいい。そこに当たり前のようにいる少女に、俺は苦笑を漏らした。

「まあ、話をするのは、な」

「あの時……あなたの魂に飲み込まれようとした時、私はなぜか恐怖を感じませんでした」

「……チトセ」

「しよせん、私たちは従魔と従魔師。魂で繋がることはできても、

それは使役するために他ならない。それがこの世界　ソウルサイ
ドの理。ならば、私はそれを否定したい。その理を超えたいのです」

「……わりい。言ってる意味よく分かんねえんだけど」

そう言って、俺はポリポリと頭をかいた。そんな俺にチトセはふ
つと笑みをこぼして、俺に向けて手を差し出した。

「あなたと共に、強くなりたいということですよ」

「　　あいよ」

チトセの小さな手を、俺は少しだけ強く握った。

@@@@

巨大な暗闇がチトセと俺を飲み込んでいた。

魂の波光が肥大しながらも、チトセの意識に同調する。やがて、それは形を成しながら、俺とチトセを鏡張りの部屋の中に引き戻していく。

「へえ。ぎこちないけど、見える。それがあんたのソウルインフ」

無表情のまま、エレナが言葉を発する。距離をとりながらも、気を抜けば次の瞬間にはやられてしまいかねないので、俺はエレナの一挙手一投足から目を離さなかった。気を抜けば、胸の中で疼く得体の知れない痛みに吞まれてしまいそうだった。

この痛みは、王に謁見した時、匣のリミッタ を外された時のあの強烈な痛みに似ていた。あの時ほど痛みは強烈ではないものの、それは確実に俺の意識まで浸食しそうなほど厄介なものだった。

「これで、あんたもステージ2ってわけね」

「……………ステージ2？」

「知らないの。従魔と従魔師は、シンクロの強さによってステージが存在するの。ソウルインフを発現できるのはステージ2の最低条件」

「俺の……………ソウルインフ……………」

呟いて、俺は振り返った。しかし、自分のソウルインフを確認することはできなかった。その代りに、暗闇のカーテンに包まれたチトセの姿が目映る。いつもより格段に重厚な暗闇のカーテンは、突風にあおられる様にはためいたかと思えば、縮み上がって、また、はためく。

不安定でおぼつかない魂の波光を身にまとうチトセの額を一筋の汗が伝い、落ちた。

「そう長い時間持ちそうにありません」

俺と目が合うと、チトセは喘ぐように声を出した。

「2、3分が限度といったところです」

わざわざ言われなくても、胸の中を這いずる痛みは徐々に大きくなっていった。

「……じゃ、カップラーメンにお湯」

「御託は時間の無駄です」

「……あいよ」

第十四話「ステージ2（後編その1）」

「一発勝負か。まあ、あいつ相手に分が悪いのは仕方ねえけど、一切実な問題があるぜ。それはまだ使えねえってことだ……！」

「どついうことですか。まだ、コントロールが利かないのですか」

「いや……なぜなら」

俺は覚悟を決めて、宣言した。

「まだ、技の名前が決まってねえ！」

神の雷が、罪人を貫いた。

第十四話「ステージ2（後編その1）」

「て、ぎゃああ！」

なんて、チトセの制裁の剣を受けて、のたうち回っていると、エレナの鞭が襲いかかってきた。俺の頬を掠めたそれは、防弾性の鏡をまるでヨーグルトのように抉^{えぐ}りとり、主人の元に戻っていく。すんでのところで、致命打を身をよじってかわした俺は、すかさず立ち上がり、チトセに食ってかかった。

「時と場合を考えろ！」

「その言葉そっくりそのまま返します」

相変わらずの無表情で言葉を発するチトセ。が、わずかに乱れた呼吸をかみ殺しているその表情に余裕は伺えない。俺は気を取り直して、エレナに目を向けた。

「……俺にとっちゃ切実な問題なんだよ」

「言ってる場合ですか」

後ろでチトセの声がツツコむ。確かに、ボケてる間に（至って真剣だが）殺されたんじゃ、身も蓋もない。ここは涙を飲んで勝負に徹するしかない……！

「全く、あんた方には緊張感つてもんがないの」

そして、そんな俺達にもっともな言葉を投げかけてくるエレナ。に俺は言っちゃった。

「てめえの格好見てもの言えよ」

「失礼ね。私は至って真剣よ」

「そっちの方が厄介だろ」

「他人の目なんてクソ喰らえ」

「王の秘書がそんなハジけてていいのか」

なんて、正論がこいつに通じないのは承知だ。案の定、エレナは退屈そうに耳をほじってやがる。つーか、さっきまでの緊張感が吹っ飛んだのは誰のせいだ。……俺のせいだけじゃないことは断わっておく。念押ししとくが、相手は女王蜂のソウルインフを持つ、ビキニ姿のふざけた女だ。ふざけんな。

「あーあ。なんか、もう萎えちゃった。ねえ、王を侮辱したこと取り消してよ。そしたら、ここで終わり」

「あ？ ふざけ」

「にするわけないでしょ」

「んな!？」

閃光が俺の目をくらませた。不意に放たれたエレナの鞭が、光速で走る。反応する暇もなく、衝撃が俺の腹で弾けた。

まるで、巨大なハンマーで殴られたような重い痛みが俺の神経を伝う。5、6メートルほど吹っ飛ばされた後に、痛みが全身が痺れた。が、そんなことに気を取られている暇はなかった。

「チトセ……！」

俺の叫び声とほぼ同時に、俺の胸の中の痛みが暴れだす。たった今受けた痛みとはまた別の、心を侵食する爛れた痛み。俺の意思を汲み取り、チトセがシンクロを強めたのだ。

一瞬気が遠くなりかけながらも、視界に飛び込む閃光に目を覚ます。

破壊音が俺の耳元で炸裂した。目標物を捉え損ねた鞭が、鏡を食って引いていく。舞い散る鏡の破片。空気を裂く音。すべてがスロームーションに思えるほど、鋭敏な感覚。シンクロが強まれば強まるほど、俺の魂が解放される。

エレナの一撃をかわすと同時に俺は銃を召喚した。二丁の銃が重なり合って、一つになる。マズル（銃口）とバレル（銃身）の極端に大きなその銃は、今まで思い描きながらも扱えなかった代物だ。

通常俺が扱う二丁拳銃は38口径の通常弾も使える便利なものだが、この銃は普通の弾は扱えず、完全に魂の波動を打ち込むためだけに存在する銃なのだが、欠点が一つ。

この銃は持主の魂を際限なく吸い尽くすのだ。だから、うまく制御してやらなければ、自滅は確定。今まで何度か試みた結果、そのどれもが、魂の波動を打ち込めず、すぐに魂を吸い尽くされ、シンクロが強制的に解けてしまい、気がつけば病院のベッドの上と散々たるものだった。

が、その厄介な代物も、今の俺にはちょうどいい玩具だ。と強が

つてみたところで、制御して波動を放てるのは一発が限度だ。それも、制御できるだけの魂の量をうまく見極めなければ、その一発もままならない。

打ち込む魂の量が多すぎれば、制御しきれず自滅。かといって、打ち込む魂の量が少なすぎれば、エレナには通用しない。

かなり分の悪い一発勝負だったが、それはチトセも承知済みだ。そして、作戦というにはあまりにも無謀だったが策はある。

息をつく暇もなく襲いくる鞭打をすべて紙一重でかわす。舞い散る鏡の破片が地面に着地する前に、俺は地面を蹴り、エレナを指す。またも煌めく閃光は、俺の体を捉えはしない。この攻撃はもう見えている。

「もう、見切ったね」

にやりと笑い、ただ一点の勝機の道を突き進む。

エレナの初撃。あの時は見えなかったが、エレナは十メートル以上離れた俺達に届く攻撃を仕掛けてきた。が、その時地面に刻まれた破壊跡は、地面の途中で止まっている。つまり、加えられた攻撃は衝撃波のような遠距離まで範囲の及ぶものではないということだ。あれは「物理的な攻撃」でありながら「物理的には不可能な攻撃」。つまり、魂の絡んだ攻撃ということだ。

そうになると、可能攻撃範囲は、エレナの魂の大きさ。つまりソウルインフに影響されるということだ。そこに、鞭自体の飛距離を足して、エレナの間合いはおおよそ14、5メートルほど。ここで重要なのが、それが衝撃波の類の攻撃ではない、ということだ。

なぜなら、限界距離がその程度であるなら、下がっているチトセの心配はなくこっちも暴れられる。何より、そうになると、エレナの攻撃は、極端に長い鞭を振り回しているということに他ならないからだ。

当然、鞭を振るうには一度振りをつけなければならぬだろう。そして、攻撃距離が長いほど振り幅は大きくなり、懐に入られ易い。どんなに攻撃が速くとも、その振りをつける一瞬の隙が命取りだ。今の俺なら、その隙を見極められる。

遠距離から一撃を加えても、エレナにはアツサリかわされるのがオチだ。が、その一瞬の隙をつけば俺の攻撃も当たる。

エレナの攻撃の数だけ、俺達の距離が縮まっていく。最高潮に高まった俺の集中力は、体を走る痛みも、胸にたまる爛れた痛みも忘れさせ、俺を快感へ誘う。

幾度も目の前を通り過ぎる死線。命の駆け引き。緊張と恐怖を帯びた冷や汗は、皮膚を伝い、ゾクリとしたその感触は、神経にまで浸透する。

絶頂が、すぐそこまで来ていた。

「採点しろよ」

わずかな隙に割り込んで、エレナの懐に飛び込み、眼前に銃を突き付ける。瞬間、エレナの瞳には、驚愕の色とともに、俺の銃だけが映っていた。

「今度は何点だ？」

俺は引き金を引いた。

第十五話「ステージ2（後編その2）」

（くっくくくくく！ よくも散々この俺をコケにしてくれたなああ！ この、クールな俺様に対する数々の無礼暴言失言千万！ 利子つけてまとめて返済してやるっくははははははあ！（高速脳内思考、この間、0、2秒ぐらい）

驚愕に染まったエレナの顔に勝利を確信したその時、確かにそれは聞こえた。

「やっぱ、二十九点」

「あ？（脳内思考停止）」

耳を疑う暇もなく、銃口から解き放たれた魂の波動は、目の前のエレナを飲み込んだ。

闇が空間を侵食する。球状に凝縮された魂の波動は、まるでブラックホールのように近づくとすべてを飲み込み、その中に引きずり込む。光から断絶されたその世界は、やがて、捉えたものを道連れに崩壊する。

目の前のブラックホールに光の亀裂が走った。そして、俺が背後に飛びのくと同時に、ブラックホールが崩壊した。

けたたましい爆音が鼓膜を叩く。衝撃が地面を伝い、鏡張りの地面にひびが走る。爆発の中心から発散する黒煙から抜け出した俺は、地面に着地すると同時に、仰向けにその場に倒れこんだ。

案の定、たった一発で魂の波光すべてを持っていかれた。シンク口するだけの波光さえ吸い尽くされた俺の傍から、チトセの意識はもう離れていた。

「……………やりましたか？」

俺の頭元に立ち、チトセが無表情で言葉を落とす。精神的にかなりの疲労を負っているはずにも関わらず、その素振りを見せない俺の宿主。ここはクールに「当然だろ」と返してやりたいところだったが、言い知れない不安が俺の胸に残っていた。

「……………手ごたえはあった」

そう言っつて、俺はなんとか上半身を起こした。煮え切らない俺の返事の意味を悟り、チトセがじつと黒煙の中心に目を留める。未だ晴れない深い黒煙は、まるで生き物のように不気味に蠢うごいている。

あの状況、あのタイミングで、しくじるなんてあり得ない。あの爆発で仕留められないとも思えない。それなのに、シンクロの影響で胸に残った痛みにも、じくじくと嫌な予感が上乘せされる。

あの瞬間に聞こえたような気がしたエレナの声は　。

「強敵でしたね」

不意に流れてきたチトセの声に、俺ははっと我に返った。顔を上げると、チトセが静かに俺を見ていた。その静かな瞳に、胸中を見透かされているようで、俺はわざとらしく息をついてみせた。確かに、不安なんてクールな男には似合わねえか。

気を取り直して、俺は言った。

「認めたくねえけど、確かに今までで一番厄介な相手だったな。い
ろんな意味で」

「とりあえず、これで王への宣戦布告にはなったでしょうか」

さらりと放たれたチトセの爆弾発言に、俺は息を呑んで言葉を返した。

「……………頼むから冗談だと言ってくれ」

「冗談です」

「……………」

真顔で言われてもな……………。こいつ、マジ　なわけねえよな？

「つーか、今更だけど王の秘書倒したのはどう考えてもまじいよな……。これって、王への謀反になるんじゃないかねえか？」

「先に手を出してきたのは向こうです。立派な正当防衛ですよ」

「……そこまで計算ずくか」

「言ったでしょう。これだけ（ぶちのめしがい）の（ある）相手と手を合わせる機会はない、と」

不敵にほくそ笑むチトセに俺は閉口するしかなかった。その顔にシンク口を強めた時、俺の魂の中で見せた微笑みの面影はどこにもない。つーか、あの時の台詞は王をどうこうするって意味じゃねえよな？

「……なあ、チトセ」

俺の声に、チトセは無言で俺に目を留めた。

「あの時、俺の魂の中で言ったこと」

言いかけて、俺は言葉を止めた。いや、正確には言葉を続けることを忘れて、そこに気を取られたのだ。

弱まっていく黒煙の向こうに見える人影。その瞬間、俺の体中に悪寒が走った。

「ほんと、あんたらには緊張感つてもんがないのね」

濃淡な闇の余韻が、霧が散るように晴れていく。

深紅の長髪。ふざけたビキニ。そこに無傷で立っているエレナの姿に、俺達は言葉を失って、あり得ないその光景に呆然とすることしかできなかった。

「自分達の立場分かってる？」

巨大な女王蜂のソウルインフから伝わってくる圧力が、俺達の体の自由を奪う。遅れて、体が震えていることに気づいた。

「ち、直撃したはずだろ……。なんで、無傷なんだよ」

最悪の状況をようやく理解しだした俺の脳が、無意味な命令を俺に下す。震える唇を噛んで、ようやく発した俺の言葉に、エレナはこともなげに声を返した。

「確かに当たってたけど、残念ね。私に攻撃は効かないのよ」

「な、んで」

「ま、覚醒したばっかのアムタは知らないでしょうけど、各々のソウルインフにはそれぞれ特性があるのよ。で、私のソウルインフの特性は絶対防御」

「……」

「攻撃を受ける瞬間、ソウルインフの身につけたブラが私の盾となったのよ。どんな攻撃も防ぎきる能力。言い換えるなら、どんな衝撃も吸収して、ポロリの確率0パーセント。名づけて、天使のブラ」

「よ

「俺らの置かれてる立場は分かっているけど、これだけは言わせてくれ。……ふざけんな、バカ野郎」

俺の切実なツツコミはしかし、虚しく空を切った。

「だから、至って真剣だって」

「同じ破られるでも、シリアスな能力に破られたかったって、この無念がてめえに分かるか……？」

そう言っつて、絶望とともに四つん這いになる俺。なんかもう、アホらしくて体の震えも止まった。その代りに、絶望感が俺の全てを支配した。

「俺のクールな必殺技がブラジャーに敗れた？ 認めねえ……認めねえよ……天使のブラってなんだ……」

「なんか分かんないけど、悪いことした？」

なんて、アホらしい空気を、チトセの制裁の剣が一刀両断した。

「うっぎゃああああー！」

「馬鹿をやっていないでさっさと準備しなさい」

地面を転げ回った後に、俺はなんとか体を起して、チトセの傍に立つ。ピアスに手を当てて、すでに臨戦態勢に入っているチトセだ

「……だが、もうこれ以上戦えないことは俺もチトセも分かっていた。」

「……まだ、終わっていません」

「おい、チトセ。もう無理だ。現時点で俺らの敵う相手じゃなかったんだよ。悔しいけど、ここは負けを認めて、王を侮辱したことを取り消すしか」

「黙りなさい。あなたにはプライドがないのですか。そんなこと、私は死んでもごめんです」

「……どこまで意地っ張りなんだ、お前は」

立っているのもやっとな俺達に、エレナが悠然と歩み寄ってくる。

「どうするの？ 私も鬼じゃないし、王を侮辱したこと取り消すならここで終わりにしてあげるけど？ なんかもう、飽きちゃったし」

「あんな猿公えてこに下げる頭などありません！」

高らかに宣言するチトセに、エレナの顔色が変わった。

「マジかよ……」

第十六話「ステージ2（後編その3）」

「チトセ。ほんの少しでいい。もう一回シンクロできるか？」

「……当然です」

言葉とは裏腹に、その声は硬い。が、自分から焚たきつけておいてこの期に及んで引き下がることなどできるわけもない、と、チトセの胸中はその顔から簡単に読み取れた。

徐々に徐々に、エレナと俺達の距離が縮まっていく。エレナの間合い。俺達にとって絶望を意味する距離までもうわずか。まるで、死へのカウントダウンを待っている心境だ。が。

「行くぞ、チトセ……！」

「ええ」

絶体絶命のこの状況。精魂尽き果てた俺達が打てる手は、もはや一つしか残されていなかった。

今にも消え入りそうな心許ない闇の衣を纏まとうチトセ。そして、俺はその手に銃を召喚した。

「これだけは使いたくなかったけど、仕方ねえよな……」

ズボンのポケットから新しいマガジンを取り出し、リロードする。

「この状況で、まだ打つ手があるのですか？」

「それが喧嘩吹っ掛けた奴の台詞か」

そう言っつて苦笑する俺に、チトセは相変わらずの憎まれ口を叩く。
が、その声から硬さは消えていた。

「……珍しくあなたが頼もしく見えます。眼科に行った方が良さそうですね」

「っへ。クールに決めてやるから、お前は下がってる」

クールな台詞とともに、俺はエレナに銃を向ける。

「なに？ 今更そんなのが通用すると思ってる？」

「……試してみるか？」

確信を胸に、俺は銃の引き金を引いた。

炸裂する銃声。放たれた無数の銃弾は、すべてエレナの足元に命中した。狙い通りに地面で弾けた銃弾は、一瞬で部屋の中を煙幕で包み込む。

「戦術的撤退！」

視界を遮る煙幕の中、俺は踵を返し迷わず走る。不幸中の幸いは、俺達が部屋の出口を背にしていたということだ。

「……あなたに期待した私がバカでした」

チトセの手を取った瞬間響く、チトセの冷めた声。に俺は言うてやった。

「俺が誰の尻拭いしてるか知ってるか？」

「……従魔は従魔師に従うのが」

「従魔師守んのも従魔の使命だ」

そう言っつて、俺はチトセの手を強く握った。反論は、返ってこない。

「とにかく走るぞ。外に出さえすればあの人ごみだ。なんとかな」

言いかけた直後、いきなり視界がクリアになった。何が起きたの

か理解できず、俺はチトセの手を引いたまま、足を止めた。と同時に、見えない何か^{何か}が空気中で弾ける音が鼓膜を劈く。

何が起きたのかを理解したのは、恐る恐る後ろを振り返ってからだ。

巨大な女王蜂のソウルインフの周りを、ゆらゆらと長い鞭が揺れていた。その様は、まるで悪い夢でも見ているようだ。超高速の鞭打が煙幕をすべて払ったことは、確認するまでもなかった。

「まだ試してみたいことある？」

ゆっくり歩いてきながら、エレナが冷淡に声を出す。

「なかったら、もう終わらせるけど」

死のカウントダウンが終わりを告げた。

閃光が瞬く。俺にできることは、体を盾にしてその攻撃からチトセを庇うことだけだった。が、エレナの鞭が俺に届くことはなかった。

エレナの鞭が俺の体を捉えようとしたその刹那、何かが、俺達の間^間に割って入った。エレナの鞭を弾き返した衝撃波が、そのまま一直線にエレナに向け襲いかかる。が、緑の輝きを帯びたその一閃は、天使のブラに阻まれた。

「無様だな、P・Y」

聞き覚えのある声が、部屋の中に響く。そして、振り返った俺の

視界にその男の姿が映った。

「私のライバルともあろう者が何たる醜態だ？」

「お、お前は……！」

威風堂々。そこには、ちよんまげ丁髷のカツラに己の魂を預けた熱血漢が立っていた。

「ト……トウオウ!？」

……そうしてまた、ボケ要員が補充されたこの闘いの行く末は、オチもはや誰にも読むことはできなかった。

第十七話「ステージ2（後編その4）」

まさに、威風堂々。俺達のピンチに颯爽と現れたその漢は、救世主以外の何者でもない　はずなのだが……。

助かった安堵より、憂鬱が先に立ってしまうこの心情を誰か察してやってくれ。

とりあえず、言っとく。

また、面倒くせえのがきやがった……。

第十七話「ステージ2（後編その4）」

「ト、トウオウ？　お前がなんでここに　」

気が抜けた途端、蓄積された疲労が顔を出し、俺はその場に崩れ

落ち ようとしたところを、トウオウが片手で俺の腕を取り、俺の体を支えた。

「！」

「どうした。クールが信条なお前が、女相手に随分なやられようだな」

「ト、トウオウ……」

「失望させてくれるな。貴様それでも私のライバルか？」

そう言って、トウオウは無理矢理俺の体を引っ張り上げた。

「……誰がライバルだ誰が」

「とぼけるな。貴様との決着はまだ着いてはいない」

「あー……あのことまだ根に持ってんのかお前」

知らない間に、また面倒くさいことになってるし……。つか、あれは俺のせいじゃなくてふっさんだろ……。

「そんなことより」

そう呟いて、トウオウはエレナに顔を向けた。俺にとってはそんなことでは済まないが、今はそれも言ってもらえないので、黙っておく。

「P・Yよ。貴様少し会わぬうちに腕が鈍ったようだな」

「バカ野郎。半端ねえぞ、あいつ……。まともにもやりあって勝てる相手じゃねえよ」

「らしいな……。あれほど巨大なソウルインフは初めて見る。伊達に王の秘書ではない、というわけか」

そう言っただけで顔を見せるトウオウ。に俺は横から声をかけた。

「お前、あいつのこと知ってんのか？」

「……まあな」

言葉とともに、トウオウは物凄い形相でエレナを睨みつつ、歯ぎしりをした。握った刀がカタカタと怒りに震えている。

「も、もしかして、あいつとなんかあったのか？」

「な・に・も……!!」

歯ぎしりしながら俺に顔を寄せ、否定するトウオウ。なんか、あつたんだな……。

「とにかく、貴様は引っこんでいろ。あの女は私が斬る」

「ま、待ちなさい……」

と、今まで黙っていたチトセが、ずいっと俺達の間に入って入ってきた。

「從魔風情が何を勝手なことを……。他人の勝負に水を差さないで
もらえますか」

「從魔師チトセ」

「決着はまだ着いていません……！」

「チトセ……」

珍しく感情を露わにしてトウオウを睨むチトセ。しかし、トウオウは冷静にチトセの嘔みつくような視線を受け止め、厳かに声を出した。

「呆れたものだな。死ぬまで負けを認めぬ気が」

「！」

「敗北を認めるのが恐ろしいか。気持ちは分かる……。が。貴様、それでも從魔師か？ 貴様に從魔の魂を預かる資格はないな」

「だ、黙りなさい！」

「まあいい。どのみち、貴様の許可など取る気もない。從魔師チトセ。よもや、私の魂を愚弄したこと忘れたわけではあるまいな。覚悟しておけ。あの女の次は貴様だ」

「もう。トウオウだったら。今はそんなこと言ってる場合じゃないでしょ」

殺気立ち睨み合う二人の間に、アヤセが仲裁に入った。

「ごめんねえ、チトセちゃん。トウオウったら、一度言い出したら聞かなくて……」

そう言っつて、諦めた微笑みをチトセに向けるアヤセ。相変わらず、この従魔師は大らかな性格してやがる。

「あなたはそれでも従魔師ですか。言っつて聞かなければ制裁してやればいいのです」

「う、うん。でも、私そついうの苦手だし」

そつ言っつて、たはは、と笑つアヤセ。

「聞いたか。見習え」

「黙りなさい」

ぼそりと耳打ちする俺に、制裁が下つた。

「うつぎゃあああああ！」

「分かりますか。こつすればいいのです」

「チ、チトセちゃん。死んじやう。これ以上はPちゃん、死んじやうから！」

滑り込みセーフでアヤセの制止が間に合い、俺はなんとか死なずに済んだとさ。

……からかうのも命がけてわけだ。まあ、重い空気戻ったからいいけどな。

「とにかく、友達がこれ以上傷つくのは嫌だから、この勝負私たちに譲ってくれないかな、チトセちゃん」

「……」

「Pちゃんも」

なんだかんだ言っつて、チトセもアヤセの笑顔には弱いのだ。決して認めはしないものの、チトセがそれ以上二人に食ってかかることはなかった。

「……ま、今の俺らじゃ贅沢は言えねえよ。その代り……半端じゃねえぞ。気をつけるよ」

「ん。ありがと、Pちゃん」

「だから、Pちゃんはよせつつつてんだろ」

「えー、せつかくあだ名かわいいのに?」

「ノーサンキューだよ、バカ野郎。俺のイメージ壊す気が」

「それについては今更心配することもないでしょう」

「……どういう意味だ、こら」

と、緊張感ゼロでだべっている俺達に、ただ一人緊張感百パーセントの堅物が歯ぎしりをした。

「貴様らには緊張感というものがないらしいな……？」

あー、どっかのビキニ女にも言われたな、それ。

「それにしても、お前らエレナのこと知ってるみたいだけど、どういう知り合いだ？」

俺の質問に、アヤセが表情を曇らせ、トウオウはさらに歯ぎしりを増した。

「ん……実は私達、二日前にあの人に襲われてね……失格って言われちゃって」

「あー……そういうことか」

「うん。間の悪いことに、トウオウがお風呂入って　ね」

「なるほど……」

魂を発揮する暇もなかったというわけか。それはさぞ無念だったろうな……。ああ、一応ここは笑うとこだ。

「それで、カツラ被る暇もなかったというわけですか。傑作ですね、それは」

「……斬る」

「ちょ……落ち着いて、トウオウ！」

「いっそ潔くスキンヘッドにでもしたらどうですか？ お手伝いしましょうか？」

「ちょっと、チトセちゃん！」

いきり立つトウオウを必死に止めるアヤセ。そして、俺はチトセに言った。

「八つ当たりは止めてやれ……」

ちなみに、その間エレナは地面に寝転んで、頬杖つきながら退屈そうに俺達のやり取りを傍観していた。

第十八話「ステージ2（後編その5）」

緑の光を帯びた斬撃が地べたに寝転んだエレナを襲う。平然と、身動き一つせず、天使のブラがトウオウの攻撃を弾き、エレナは欠伸を洩らしながら立ち上がった。

「話はもう済んだ？」

「ああ。ここからは私が相手だ」

敵かに宣言するトウオウに、エレナは首をかしげた。

「あんた、この間失格にした従魔だよね。もしかして、逆恨み？」

「黙れ。あんな形での勝敗など認めん。悪いがもう一度立ち合ってもらっぞ。そして」

言葉に怒りを溜めて、トウオウは刀を強く握り直した。

「貴様が奪っていった私の魂、^{カツラ}絶対に取り戻す……！」

「魂って、あのカツラのこと？」

「そうだ！ 私がこの勝負に勝った暁には、私の魂、返してもら」

「あれ、捨てちゃったけど」

その言葉は、おそらくトウオウの頭の中で、エコーとなり響いた

ことだろう。ほんの少しの間放心した後、熱血漢は血走った眼でエ
レナを睨み、地面を蹴った。

第十八話「ステージ2（後編その5）」

「今のやり取りで全ての事情が呑み込めたな」

「相変わらず戦う理由が笑い話ですね、あのハゲは」

「トウオウにとっちゃ切実な問題だろ。それに、そのおかげで、俺
達もこうして何とか生き残ってんだ。あいつが来てなきゃ、あの時
確実にやられてた」

そう言って、俺は部屋の壁に背中を預けたまま、地べたに座り込
んだ。ステージ2の状態までシンク口を強めた後遺症＋エレナから
受けたダメージ。極度の疲労で気は遠くなるのに、痛めた体が悲鳴
をあげて、気絶すら出来やしない。おそらく、肋骨の二、三本は折
れているだろう。もう、立っているのもままならなかった。

そんな俺の横で、同じく疲労困憊のチトセは、しかし、立ったまま動かなかつた。

勝負をトウオウに譲ったことへの不満か、それとも、こうして部屋の隅っこに引っ込んでいることへの屈辱か。無表情でいながら、チトセは俺の言葉に返事を返さなかつた。

「……まあ、トウオウの言ったことはあんま気に」

「言われなくても、ハゲの戯言など真に受けません」

速攻で言葉を返してくるチトセに、俺は苦笑した。

「そつか。なら、準備しといてくれよ」

「準備？」

「ああ。もう一度、ステージ2の状態までシンクロできるように回復しといてくれ」

「それは……」

「どつちとも戦り合ってただから分かるだろ。今のトウオウじゃどうひっくり返ってもあいつには勝てねえ。……気は進まねえけど、な」

「しかし、今の私達が加勢したところで勝てるとも思えません」

「ああ。でも、一つだけ気になることがあんだ。もしかしたら、あ

いつの絶対防御ってやつをなんとかできるかもしれない。それも、2VS1が前提の話だけだな……」

俺の言葉に、チトセは息をついて俺の横に腰を下ろした。

「 プレインヨーグルト」

「……なんだよ？」

「私達は、強くなれたのでしょうか……」

今、俺が感じている敗北感を、チトセも同じように感じているのだろう。シンクロしていなくても、俺達は同じ思いを共有していた。

「最悪、あいつに目にももの見せてやるよ」

膝を抱えるチトセの頭に、俺は優しく手を置いた。

「プレインヨーグルト……」

「ああ」

「従魔の分際で偉そうに励まさないでください」

「じゃあ、どうして欲しいんだお前は……」

@@@

「貴様あ！ 我が魂を弄ぶだけでなく、捨てたというのかあ！ おんのれえええ！」

「だって、あんなカツラいらないし」

「ならばなぜ奪っていったっ！」

「なぜって、ぢんまげ丁髷のカツラだなんて、いじってくださいって言うてるようなもんでしょ」

「訳の分からんことを……！ 貴様は必ず斬る！ 斬って捨てる！」

「好きにしたら？」

会話の間中も戦闘は繰り広げられていた。しかし、その構図はやはり俺の予想を裏切ることなく、一方的な展開だった。

遠距離からのエレナの息を着かせぬ攻撃に、トウオウは近づくこともできず、防ぐことで手一杯。有り余る気合いと怒りを完全に持て余し、空回っているその様は、こちらとしても同情するより他はなかった。

トウオウの獲物は今更解説もいらなだろうが、刀だ。元来、近距離タイプの武器だが、トウオウの場合は魂の波動を刀から打ち出せるため、中距離戦も可能だが、すでにそれは天使のブラに阻まれ

ている。ならば、トウオウに残された唯一の勝機は接近戦しかない。

遠くから魂の波動をぶつけるより、直接刀に込めた波動を打撃としてぶつけた方が、威力が増すのは容易に想像できる。しかし、肝心の接近戦をさせてもらえない以上、トウオウに勝ち目はまるでないのだ。

そもそも、一度戦り合ってみて実感したが、エレナを相手にするには最低でもステージ2でなければ話にならないのだ。しかし、今のトウオウは確かに俺と戦り合った時より魂の波光は増してはいるものの、ソウルインフを発現するには至っていない。というか、俺と同期でソウルインフを発現できる奴なんて、俺の知る限り誰もいない。

「あれではやられるのも時間の問題ですね。回復の時間稼ぎも務まらないとは、口ほどにもないハゲです」

旗色の悪い勝負に容赦ない感想を述べるチトセ。に俺は言った。

「いや、まだ分かんねえぞ」

「え？」

「見るよ。トウオウの奴、なんかやる気だぜ」

今まで、がむしゃらに間合いを詰めようとしてエレナの鞭の餌食になっていたトウオウが、初めてエレナの間合いから退いた。自らを戒めるように目を閉じ、深く息を吐き出すトウオウ。その様子から、俺はまだトウオウが何か「とっておき」を隠し持っていることを察した。これから、一か八かの大勝負にトウオウが打って出よう

としていることも。

「惨めですね。手も足も出ず、いよいよ諦めましたか」

「お前は黙ってる……」

相変わらず、蔑んだ相手には容赦ねえな、こいつ……。

呼吸を整えたトウオウが、静かに目を開き、腰に差した鞘に刀を納めた。そして、後方に控えるアヤセの隣に立ち、トウオウは言った。

「アヤセ。あれをやるぞ」

トウオウの言葉を予期していたのだろう。アヤセは「うん」と肯きながらも、心配そうな目をトウオウに向ける。

「でも、いいの？ あれをやっちゃうと……」

「……構わん。このまま敗北するよりは　な」

「う、ん。そだね」

その言葉とともに、アヤセの体を覆っていた緑色の魂の波光がふっと消えた。

「シンク口を解きましたね。いよいよ諦めましたか、あのハゲ」

「お前、分かってて蔑んでるよな？」

などとチトセにツッコミを入れた直後、トウオウの声が部屋いっぱいに反響した。

「聞け、P・Y！」

「ハゲが呼んでますよ」

「だから、お前は黙ってる……」

俺達のやり取りは、もちろんトウオウには届いていない。

「これから使う技は、貴様との再戦の折りに使用するはずだったものだ！ しかと、その目に焼き付けておけ！ あの女の次は貴様なのだからな！」

「無視して帰りましょうか」

「許されると思うなよ？」

しかし、ここに来ての奥の手とは、まさか。

「しかと見届けよ！ 我が魂のソウルインフ！」

威勢良く叫ぶ、トウオウ。そして、魂を解放するアヤセ。

「やっぱ、そう来たか……」

この憂鬱は何に対してのものだろう？

「あのハゲがステージ2とは生意気ですが、興味はありますね」

「……多分、この場にいる全員がな」

ただ一人真面目に勝負に徹する熱血漢は、おそらく気づいていないのだろう。

そのとおきがおきが、勝負の緊張感すべてを持っていったことに。

「どんなソウルインフでしょうね」

「お前、またいじる要素が増えるって喜んでんだろ？」

なぜか、同情を禁じ得ない俺だった……。

第十九話「ステージ2（後編その6）」

緑光の柱がトウオウとアヤセを飲み込み、部屋の一部を彩る。二十メートルは優に超えた天井にまで達する魂の波光は、強靱な意志と決意を露わに、空間に満ち満ちていた。

「でけえな。トウオウの魂の波光」

俺の言葉に、チトセは光の柱を眺めながら、声を返した。

「見ているだけで、暑苦しい波光です。アヤセもよくあんなのと同じクロしてられますね」

天を衝く意志と決意が、やがて収まり収束する。魂の波光の中で二人の人影が徐々にはっきりと輪郭をかたどっていく。

「いよいよ、お披露目ですね」

「お前な」

俺はその好奇心を理解しつつも、チトセに言った。

「写メ撮ってやんな……」

ジーンズのポケットから携帯電話を取り出し、カメラを構えるチトセ。その口元には邪悪な笑みが浮かんでいた。

第十九話「ステージ2（後編その6）」

空気が変わった。

あまりにも、大胆に。あまりにも、繊細に。その漢が背にしたソウルインフは、その漢の象徴。その漢の生き様。

誰も（声を出して）笑える者はいなかった。

例え、それが丁齧ちやんまげのカツラであつたとしても。

「……………！……………！」

込み上げる笑いが、折れた肋骨を容赦なくむち打ち、俺は激痛と呼吸困難に喘ぎながら、四つん這いになり、何度も額を地面に打ち付けた。その横ではパシャパシャとシャッター音が鳴り響く。

が、笑激の光景には、まだ続きが用意されていた。

トウオウの背に浮かぶ、幅、高さ、共に一メートルはあろうかと

いう巨大な丁髷ちよんまげのカツラのソウルインフ。緑光の魂は、還るべき場所を求めている。

「！」

激痛に苛まれながらも、俺は確かにその奇跡の光景を目撃した。

肌身離さず身に着けられた丁髷ちよんまげのカツラを自ら剥ぎ取るトウオウ。そして、禿げあがったその頭にフィットする、緑光の魂。

ベストサイズに縮まったソウルインフは、あるべき場所に還り、漢を照らす。

「……！……！」

俺は腹を押さえながら、何度も拳を地面に叩きつけた。笑い死にという言葉の意味を今の俺なら自信を持って言える。それは、丁髷ちよんまげのカツラだと（笑）。

端で見ている俺がこの有様なのだ。当然、対峙するエレナは。

「……！……！」

声も出せず、俺と同じ状態に陥っていた。

「……笑わば笑え」

「！」

十メートル以上あった距離を瞬きする間に潰し、トウオウがエレ

ナの背後を取っていた。

「ならば、私は笑う者全てを斬って捨てるまで」

遠目からでも分かる。確かにその一瞬、殺気のコもった眼光は俺にも向けられていた……。

振り下ろされた刃は、防弾性の鏡を苦もなく斬り捨てた。

一撃を終えたトウオウが舌打ちをして、顔を上げる。その視線の先には、上空に舞うエレナの姿があった。

反転した体を、空中でしなやかに捻って着地を決めるエレナ。その様はまるで宙を舞う蝶のように鮮やかだったが、蝶はあえなく地に伏せた。

「……………！」

たった今、一瞬にして背後を取られたばかりだというのに、またもや地べたにうずくまり、腹を押さえて爆笑（声が出せないほど）するエレナ。それを見て、トウオウは静かに呟いた。

「斬る……………！」

頭に乗せたソウルインフが、トウオウの闘志に呼応し、まばゆく輝く。本人が本気になればなるほど、笑いの神は降臨する。

「……………！」

爆笑しながらも、トウオウの猛攻を器用にさばくエレナ。その動

きはさらに加速し、もはや俺達の目には二人の残像とともに、オレンジと緑の光しか捉えることはできなかった。

「諦める。あの動きをカメラで捉えるのは無理だから」

隙あらば、まだしつこく撮り溜めてやろうと、携帯電話のカメラを構えるチトセに、俺は呆れて声をかけた。

「にしても、こんなに強かったのかよ、トウオウの奴。正直ここまでやるとは思わなかったぜ」

「そうですか？ ステージ2のあなたの動きときほど変わりませんよ」

「……遠回しに俺のこと大したことねえって言ってんのか？」

「あなたと同レベルとあっては、ハゲの敗北は火を見るより明らか」

「……せめて、遠回せよ」

しかし、チトセの台詞を否定することはできなかった。確かに、トウオウがここまでやるとは思わなかったが、その強さは俺の予想を覆すまでには至らない。トウオウがエレナに勝つビジョンが、俺には全く思い描けなかった。それは、俺自身もそうだが、

「少しは回復したか？」

精神力は体力とは違い、一休みすれば回復する、などという定義は当てはまらない。シンクロにより疲労した精神力　言い換えれば、魂の疲労を癒すのは、長い時間が必要だ。

他人の魂に触れ、シンクロするという行為は、潜水することに似ている。

深く潜れば潜るほど、己に負担がのしかかってくる。信頼と絆、それ以外の未知数の要素が酸素ボンベとなる。だからこそ、俺達は今以上深く潜ることは出来やしない。

それでも、今回俺達は未知の領域へ潜り込んだ。その負担はおそらく俺などより、チトセの方がずっと上だろう。

それを知りながら発した俺の言葉は、チトセへの信頼に他ならない。意地っ張りな俺の従魔師が、どう返事を返してくるかなんて、聞くまでもなく承知済みだ。

「当然です。あなたの方こそ、その様で使い物になるのですか」

「誰にももの言ってるんだよ」

口元に笑みを携え、俺はゆっくりと立ち上がる。目の覚める肋骨の軋む痛みは集中力でカバーする。ステージ2、もう一度あの状態まで持っていければ、痛みなど感じる暇も与えない。

「タイミング、間違えんなよ」

「あなたこそ、誰にももの言ってるのです」

均衡が崩れだした。

徐々に、オレンジの光が緑の光を押し出し、強烈な閃光が、緑の

光を弾き飛ばす。吹っ飛ばされたトウオウが、地面を削り、壁に激突する。ようやく静まった動は、二人の優劣を分かりやすく表していた。

今にも消え入りそうなほど弱まった、丁髷のカツラのソウルインフ。対峙する巨大な女王蜂のソウルインフは、二人の戦力差を残酷なほど明確に物語っていた。

「あんたの一発芸（ステージ2）、もう続かないの？」

ゆらゆらと長い鞭を弄びながら、エレナが瀕死のトウオウに言葉を投げかける。重い体を起こしながら、トウオウは険しい顔でエレナを見据えながら、刀を握り直した。

「残念ね。もう、飽きた」

とどめの一撃がトウオウを襲う。その刹那、闇の波光が俺とチトセを覆った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6953d/>

fairy-tale

2010年10月8日14時05分発行